

42533

教科書文庫

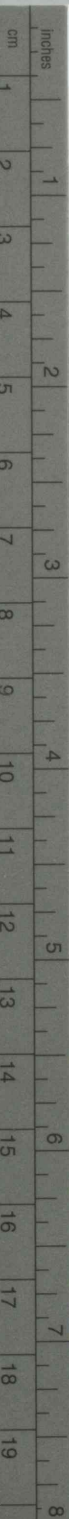
4
810
44-1933
200030 2101

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

375.9  
Ma7  
資料室

帝國實業讀本

卷三



375.9  
Ha7

資料室

文部省檢定濟

昭和三十八年八月二日 實業學校國語科用

文學博士 芳賀矢一 編  
文學博士 上田萬年  
文學士 長谷川福平 訂補

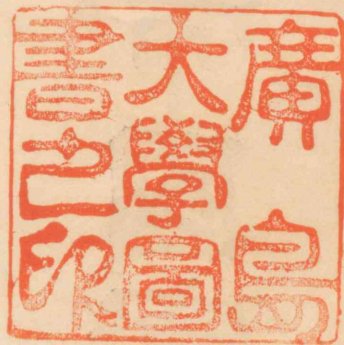
# 帝國實業讀本

東京

合資會社 富山房發兌



勿來關  
谷口香嶺筆



帝國實業讀本 卷三

目次

一	大日本國(詩).....	一
二	法隆寺の鐘.....	四
三	お遍路さん.....	八
四	勿來關.....	一四
五	春の一日.....	一七
六	蛙の聲.....	二
一	蛙の聲.....	二
二	山吹の花.....	三
三	筍.....	三五

三	自然の復讐(自修文)	丘淺次郎	二六
七	佛の化身	相馬御風	二五
八	親の慈愛	柳澤淇園	四三
一	五月雨		四三
二	長たる者		四四
三	世渡る業		四四
四	親の慈愛		四七
九	夏の印象	河井醉茗	四九
一〇	桶狭間の戦その一	遠山信春	五三
二	桶狭間の戦その二	遠山信春	五三
	辛抱くらべ(自修文)	松村介石	五九
三	六月の朝(詩)	宮崎丈二	七〇
三	山寺	若山牧水	七四

一四	趣味の巖島	五十嵐力	八三
一五	日本の風光	伊東忠太	八七
一六	桃源郷伊豆の大島	有島生馬	九四
一七	朝の歌(詩)	人見東明	九八
	趣味の日記(自修文)		一〇一
一		徳富健次郎	一〇二
二		中勘助	一〇四
六	樂地	幸田露伴	一〇八
九	偉人野口英世		一一一
一〇	今	市島春城	一二七
三	明倫歌集より(古歌)		一二六
三	桃山御陵	田山花袋	一三〇
三	ゆかしの杉(自修文)	幣原坦	一三四



帝國實業讀本 卷三

大 一 大日本國

御祖の神の

産ませし國に、

皇孫降りて

君とし知らず。

寶祚は天地と

窮りあらず。

この國、この君

世にたぐひなし。

三	丘の上……………	吉江喬松……………一四
四	田園雜興……………	大町桂月……………一五
五	繪畫の感化……………	那珂通高……………一五
六	國史に返れ……………	徳富蘇峯……………一六
七	祖先を崇び家名を重んず……………	……………一七

大君、民を

子のごとおぼし、

國民、君をば

親とし慕ふ、

さながら一家の

睦はとほに、

この國、この君

世にたぐひなし、

大和の國の

しづめの山と、

富士の嶺み空に

神さび立てり、

とはに

しづめの山

神さび

貴き皇國みくにの

姿を見せて、

高きはこの山、

世にたぐひなし、

日出づる國の

しるしの花と、

櫻は霞に

まがひて咲けり、

氣高く雄々しき

國ぶり見せて、

匂ふはこの花、

世にたぐひなし、

國くにの

(一) 俳人。名は清  
 明治七年松山  
 市に生れた。山  
 詣師。凡人。俳  
 句入門等の著  
 者の外に句集も  
 ある。  
 (二) 法相宗の本山  
 奈良縣生駒郡  
 法隆寺村にあ  
 る。聖徳太子  
 の建立。  
 くさくさ  
 猿臂を延す

## 二 法隆寺の鐘

高濱 虚子<sup>(一)</sup>

山門をはいると、すぐ右側に寫眞や、寶物の説明や、くさぐさの物が並べてあり、蒲團を掛けた小さい猫火鉢が置いてあつて、人は居らぬ。案内者が「八さあん」と呼んだが、返事が無い。鐘がゴーンと鳴る。案内者は黙つて猿臂を延して、戸棚の横から長い鍵を出して、我等の前に立つた。我等は塔を見上げ、山門を見返りつゝ、その後について行く。案内者は金堂の横の扉に鍵を突つこんで、コツ／＼とこねくるが、どうしても開かない。鐘がゴーンと鳴る。案内者は鍵を突つこんだまま鐘樓の方へ行く。見ると、二階建の様になつてゐる鐘樓の



法隆寺の鐘

高濱 虚子





法隆寺鐘樓

下に、袴とも腰衣ともつかぬ様な物を腰に纏うた一人の男が、長い綱を持つて立つてゐる。我等も案内者の後について行く。男が綱を緩めたと見ると、鐘がゴーンと鳴る。八さん、あけておくれ、わたしがその間撞いてゐるから。」と、案内者は代つて綱を持った。寺男は黙つて綱を渡して、金堂の方へ走つて行つた。案内者は一、二、三、四と口の中で撞木の揺れる數を數へて、五つ目に綱を緩める。さうすると撞木が鐘に當る。ゴーンと鳴る。曾てフラン

梵音

スから日本の美術を調べに來てゐた人が、特にこの寺の鐘を賞めてゐた事を思ひ出す。見上げると、他の寺の鐘樓とは違つて、鐘は露出してゐない。薄暗い所に、細長い形をした餘り大きくない鐘の、青錆が品よく古色を呈して附いてゐるのが、窓から射入る光線で朧氣ながら見える。撞木が鐘に當ると、ゴーン、ゴウウ、ゴウウ、ゴウウと、靜かに遠くへ傳はる響にも、上代の音がある。余は堪らなくなつて、どうか僕にも一度撞かしてくれぬかと案内者に頼んで、教はるまゝに一、二、三と數をくりつゝ、五つ目に大きく引いて綱を放した。撞木が當るには當つたが、纔かに音を發したばかりで、涼しい清い梵音は出なかつた。残念に思つて、今一度と數をくつて、ま

(一)俳人、漢詩人。姓は福田、靜處と號した。京都に住んで、子規と交遊した。

た綱を緩めた。前よりは稍好い音を出したが、それでも心耳を澄す音ではなかつた。同行の把栗が、僕にも一つ撞かしてくれ。」と、綱を持つて撞いた。同様に力ない響であつた。漸く金堂をあけた寺男が歸つて來て、「そんな撞き様をしてはどうもならん。」と、綱を取つて代つて撞いた。鐘の音は再び澄んだ力のある音に復つた。

我等の撞いた鐘の音を、法隆寺の村人は何と聞いたらう。田を耕しながらその力のない音に耳を聳てて、佛力の俄にかくも衰へたるかと、定めて驚いた事であらう。しかし、それは唯三撞きであつた。四撞き目は再び元の音に戻つて、天日は舊の如く明らかになつた。あゝ、この靈鐘を瀆した罪は深

(一)俳人。名は藤吉。明治十七年東京市に生れた。觀音巡禮。京洛小品。芭蕉風景。山行住等集。あるの外に句集がある。

い。しかし、法隆寺始つて以來、佛法の滅びるまで、この寺の鐘は何萬遍鳴る事であらう、何億遍鳴る事であらう。何億遍でもよい。そのうちの二遍だけは余が撞いた鐘の音だと思ふと嬉しい。若し次の世にこの罪深い余が、萬々一にも佛の國に生れる様な事があるならば、それは確かにこの二撞きの鐘の音による事と信ずる。

この村はきぬたも法の響かな

### 三 お遍路さん

(一) 萩原井泉水

りんく〜といふさえた音が、遙かの山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。——「お

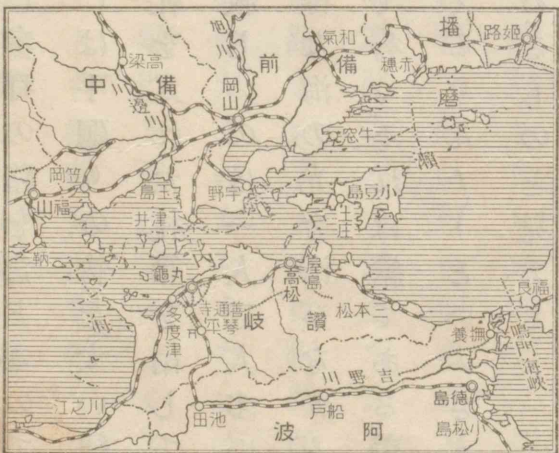
(一)平安時代の高僧。名は空海。讃岐の人。承和二年(八四〇)延喜五年(八三三)六十二(一)弘法大師の諡號を賜はつた。

(二)香川縣大川郡大串崎の北方海中

功德

遍路さん」とは、何といふ親しみ深い言葉だらう。——四國八

十八箇所に遺された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのがお遍路さんである。しかし、いかに信仰の爲とは言へ、四國を一巡する事は、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵の事ではないので、四國の代りにこの小豆島(二)にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積得る事とされてゐる。島四國と言ふ言葉も出來てゐる。島四國の遍路にしても、女の脚



(一)岡山縣(備前)岡山市  
 山陽線鐵道の要驛  
 (二)香川縣高松市  
 (三)小豆島第一の都會  
 岡山から十八哩、高松から十二哩

先達

では六七日かゝるといふ事である。多くは岡山から、若しくは高松から來るお遍路さんは、船で土庄港(土庄)に著く。其所から發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路をたどるのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、寂しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀の様な海の光を浴びながら、海の近い麥畑の中の路をたどつて行く。それは繪である。美しい事である。この山莊にまで聞えるりんくといふさえた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に、路を歩く

教門



お遍路さん

のに好い氣持であり、また農事も比較的閑な四月頃に一番多く見受けるといふ事だ。この頃島に著く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して來る。一體遍路といふものは、何時頃から始つたものか知らないが、大師の教門を弘くする上から言つても、各自の信念を厚くする上から言つても、誠に好い事だと思ふ。そればかりではない。

お遍路さんは到る所で愛せられる。また恵まれる。お遍路さ

扶助

讚仰  
欺瞞

眞實の道

ん同志もまたお互に遍路であるといふ事の爲に信頼する。また扶助する。これが實に好い事だと思ふ。未知の人たちが連になつて親しんで行く。路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふ事だ。これは、遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識から來るのだ。この道に參するには、知識も、修養も、資格も、そんな物は何もいらぬ。婆さんでも、娘でも、男でも、子供でも、唯一つの道を信ずる事によつて、この尊い心持に一致する事が出来るのだ。南無大師遍照金剛。と讚仰する聲が出て來るのだ。これは實に美しい事だ。争鬭と欺瞞と

暗示

の満ちた社會のうちにあつて、信頼と扶助とに心を合せて行くくらゐ、美しい事が他にあるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に美しいのである。そしてこれは獨りお遍路さんの上の事だけではない。私たちは皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならない物を負うて、自分の名前を書いた札を撒散しながら、自分自分の道を遍歴してゐるのである。しかも私たちの周圍には、このお遍路さんに見る様な信頼と扶助とが行はれてゐるだらうか。私は思ふ、私たちはこのお遍路さんに學ばねばならない。遍路といふ行事を遺した弘法大師の暗示を感じな

(一)元新聞記者。名は宗次郎。文久二年(一八五二年)安藝國に生れた。日本史蹟に著した。上義士。名は百話等の著あり。

(二)清原氏。出羽の豪族。寛治七年(一〇七四年)に攻められて殺された。

(三)武衡の甥。源頼義の子。天仁元年(一〇七〇年)六月八日(一〇六十八年)歿。

(四)通稱八幡太郎。源頼義の子。天仁元年(一〇七〇年)六月八日(一〇六十八年)歿。

(五)常陸と磐城との國境。

ければならない。そしてたとひ人間の悉くがお遍路さんの心を心としないまでも、私たちは先づ彼等の信と愛とを以て人生を歩きたいものである。

— 山水巡禮 —

### 四 勿來關

(一) 熊田葦城

武衡(一)既に縛に就き、家衡(二)誅に伏し、與黨また斬に處せらる。義家出羽を治むる事十年、國內靜平にして民心悅服す。乃ち留守を置きて京都に還らんとす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草、馬蹄輕し。客心悠々、また戰時の秋に似ず。行きく(三)て勿來關に差掛る。山上模糊として白きは雲か、地上續紛として翻るは雪か、雲と見えしは梢の

兵馬倥傯  
襟懷

逸興頓に湧

一かへり二  
かへり

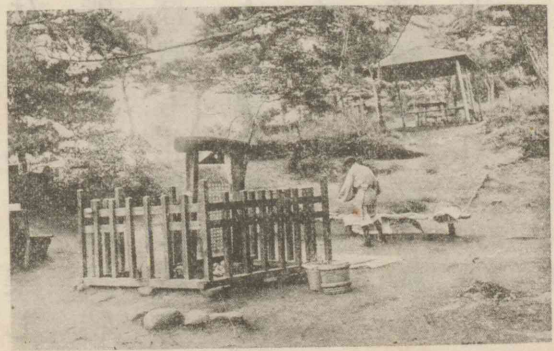
長亭短驛  
門前市を成

花、雪と思ひしは散來る櫻。關山春深き所、心なき身も感などか起らざらん。兵馬倥傯(四)の間にありては、月を觀ても樂しからず、鳥を聽くも嬉しからじ。今や干戈既に收りて、襟懷特に安し。將軍駒を樹下に駐(五)めて、顧望すれば、胄も花、甲も花、身は何時しか畫中の人となる。逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。

吹く風をなこそその關と思へども  
みちもせに散る山ざくらかな  
一かへり二かへり口ずさみつゝ、永き日の暮れなんとするをも知らず。

かくて長亭短驛、日敷を重ねて京に著す。百戰功を重ねて一門光を添ふ。來りて賀を述ぶる者、門前市を成す。武人は武

を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人、義家に向ひて語る、「陸奥は名所多き國と聞く。年久しくかの地にありつれば、皆それぐに見候ひなん。これのみこそ羨ましき心地すれ。」と。義家畏まりつゝ答ふ、「心のどけく候はんには、ゆかしき事も候べけれど、軍に暇なき身には、優しき詠とても候はず。唯勿來關と申す所にて、花の散る様の餘りに興深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしが、そのまゝにうち過ぎなんも口惜しく、をこの口ずさみに任せてかくなん仕りぬる。」とて、かの吹く



勿來關の址

秀歌

(一) 詩人、小説家、名は春樹、治五年長野に生れた、飯倉村、生れた、飯倉村、多集、春風、詩集、童話集、感想、童話集、著者、ある、(二) 群馬縣利根郡、文殊山に總發、武藏野に、東平野に、東平野に、注に於て、大關、一注に於て、大河、二注に於て、大河、三注に於て、大河、メ、一注に於て、大河、二注に於て、大河、三注に於て、大河

風をの歌をうち誦すれば、實にも秀歌をこそいたしつれ。」とて、感歎特に淺からず。花は櫻木、人は武士。この人この花を詠じて、花と人と千古に香し。  
——日本史蹟——

五 春の一日

(一) 島崎藤村

今年の春は雨多く、ともすれば空曇りて、快晴と言ふべき日は、少かりしを、珍しくも今日は雲收りて、空の色も眼に心地よし。かくて興も湧上り、足も浮立ちければ、友を誘ひて利根川のほとりに遊ぶ。  
見る度毎に新しきは、朽ちず盡きざる自然の様なりけり。殊に雨收りての後なれば、樹といふ樹、草といふ草、げに何れ

酔ひしる  
恍惚

幽懷を遣る

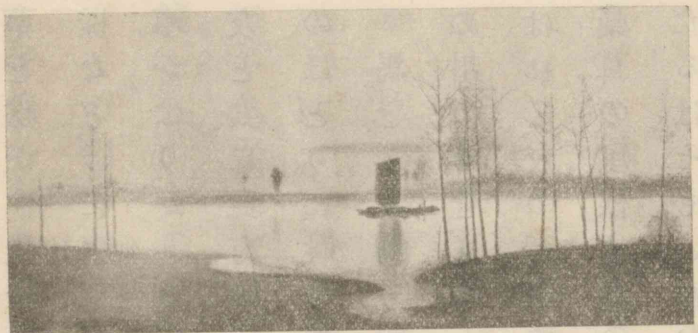
も緑美しき若葉を伸べて、活々と大氣を呼吸する様、目に見ゆる心地す。花やかに射す日の光の麗しさよ。柔かに吹渡る春の風の爽かさよ。我は酔ひしれたるが如く、恍惚としてこの景色の中を行くに、松生茂れる小高き丘あり。友は此所に遊ぶ事を好みて、常に來りて幽懷を遣るとかや。右に左に眺め入るに、松が根に咲出でたる一もとの花あり。蘭かと思へば蘭にはあらで、あらゝぎの花なりけり。さるにても、その花の形の畫きたらんが如く、塵も据ゑざる風情の貴さよ。とて、友は花を愛づるの情に堪へてや、摘取りて黒き帽子に挿みぬ。その花をかざして、微笑みて松蔭に立てる姿は、古の物語中の人物を目のあたり見る心地さへしたり。

一眸のうち

えも言はず

(二)共に茨城縣  
(下總國)北相  
馬郡

(鏡)



利根川 (筆年古原上)

舟を浮べて、はえか釣らんと綸を垂れたる様、籠を背負ひ、た

我等はうち連れてこの丘を下りぬ。利根川の畔に出づれば、楊柳の花咲満ちたり。高き岸に上りて眺むるに、遠き山々、近き村々、何れも一眸のうちに斂りて、携へ來りし雙眼鏡に入る桃の花の景色、えも言はず。  
小貝川流れて利根に入るあたりは、左に戸田井の柳萌出でたるが見渡され、右には羽根野の漁家兩三軒岸に臨みて、物洗ふ女の様も情趣を添へたり。



(嘶)

すきの目立ちたるを懸けたるが椿の花蔭を唄ひ行く様、煙草を吹かす農夫の心安き様、柳に繋がれたる馬のいなゝく様など、げに車東西に馳違ひ、煤煙暗く空を覆へる都の空と事かはり、かゝる田舎ならでは見らるまじき景色なり。我は友と共に此方の岸をさまよひ、彼方の堤を傳ひて、日一日、川のほとりに眺め暮しぬ。

馬を牽き鋤を肩にして歸る農夫の後に附添ひ、眺め飽かぬ川の畔をさまよひ歸るに、俄に鳴き出したる蛙の聲に誘はれて、友の指さす方を眺むれば、彼方に立てる野の家あり。藁葺の屋根は春の星を帯びて、寂しき中にも深き趣を具へたるは、そもいかなる人の住めるにかあらん。

三

六 蛙の聲

近松秋江<sup>(一)</sup>

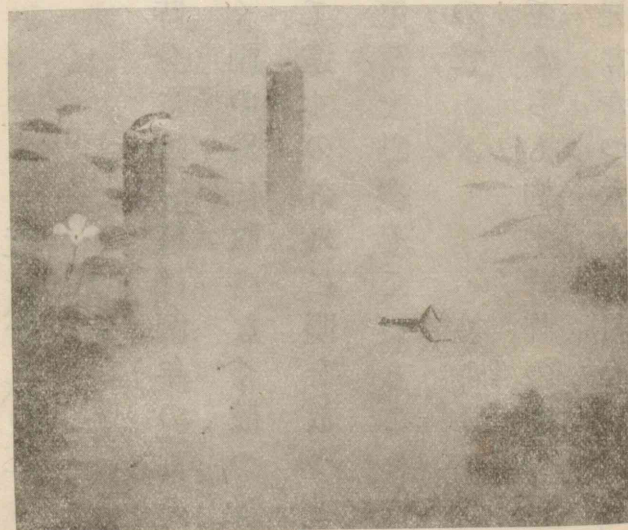
(一)小説家。本名徳田浩司。山縣明治九年、岡山縣生れた。霜凍る、筆、近松、秋葉、江集、ある。

まだ氣候のよく定まらぬ時分に、咲く櫻は、例年の通りやつと咲出したと思ふ間もなく、雨の爲に敢へなく散つてしまつたが、二階の縁側に立つて遠くの郊外に眼を放つと、新緑の色が爽かに、遠近の森や籬落を點綴してゐる。これから懐かしい青葉の五月になるのだ。

この間ぢゆう、四月に入つてからも約半月許の間、一日として春らしい美しい日影も見なかつたが、昨日今日は愈々本當な春が來た事を思はせる様な麗かな日が照つてゐる。縁

三

側に立つて、静かに春たける風物を眺めてみると、どこからともなく、遠くの方から蛙の鳴く聲が微に聞えて来る。私はこの春先の蛙の鳴く聲を好む。それは、もの憂げな、懐かしみのある、安らかな休息をさそふ様な音を含んでゐる。こゝらあたり郊外の田も、畑も、年々市人の住宅地になつて、今は高臺の下の低地に僅かばかりの田圃が埋め残されてゐるばかりである。その



(筆良三井酒) 邊 水

蠶食

田圃の際に、日々どこからか塵埃を積んだ車が来て、恐しい悪臭を放つ塵埃を捨てて、田を埋めてゐる。蛙の自由な棲息場は、その爲に日々蠶食されて行くのである。蛙の聲は大方そつちの田圃から聞えて来るのであらう。人類の増殖は、勢ひ自然を破壊し、人類以外の他の動物を驅逐して行く。これは已むを得ぬ事であるが、また愛惜の感も深い。文明はどこまで進んでも、窮極する所を知らないであらう。しかし、我々は人間ばかりで住みたくない。我々以外の動物も、植物も、成らう事なら共に自由に榮えさせて置きたいものである。

愛惜の感

二 山吹の花

蛙の鳴く聲を静かに聽いてゐると、私はおのづから山吹

假睡をさそふ

挿秧

(一) 淀川の一支流で三重縣伊賀國の西北方に發して京都府境に合流する

の花を聯想する。山吹の花の咲く頃は丁度今である。或山裾を繞つて流れてゐる小溝に沿うた田舎路を歩いてゐると、堰の畔に山吹がしなやかな枝をかざしてゐて、緑の小草の茂つた畦で、蛙が假睡をさそふ様に、微な聲で鳴いてゐる。淡紅色の蓮華草の咲亂れた田には、土手を溢れる様な漫々たる春の水がしかけられて、農夫はやがて其所に挿秧の用意をしようとしてゐる。

私は田園を歩いてゐて、屢、そんな畫的な光景に出會ふ。さういふ自然の情趣に恵まれてゐる所は、近畿の地方に多い。京都から奈良の方へ行く<sup>(一)</sup>木津川近くの村里などには、特にそれが多い様である。芭蕉が

(焙爐)

風味

綜合

山吹や宇治のほいろの匂ふころ  
と言つた句は、最もよくさういふ氣持を言表してゐる。

三 筍  
筍の新しい風味のあるのも、またこの頃である。私は筍を味はふと言ふよりも、筍その物を見るのが好きである。芭蕉も

筍や幼き時の繪のすさび  
と言つてゐる。多分幼い時に筍の繪を描いた事を思ひ出したものであらう。

私は筍の形や色、またそれ等を綜合した、あの若々しい、そして雄健な勢に無邪氣な興味を感ずる。幼い頃、村の子供と

連立つて、よく竹藪の垣根を探して、筍狩をした事を懐かし  
く想ひ起す。雨にぬれそぼつた緑  
の荆棘の中から、恰も大地の底か  
ら生え出た物の様に、すく／＼と  
して頭を現してゐるのを見出し  
た時の悦を忘れ得ない。

私の故郷の家の裏の茶園の隅  
にも、もう五十年も前に父が植ゑて  
置いた孟宗竹があつた。後に、屋敷  
の内に竹藪のあるのは家相に好  
くないと言つて、根から掘取つてしまつた。しかし私は、屋敷



(筆朝紅喉籬) このけた

總菜

の内に竹藪があつたとて、それが家相に障る道理はないと  
言つて、笑つてゐた。自分が家郷を出てから既に四十年近く  
になる。それでも、もう悉く掘取られたと思つてゐたのだが、根  
が地中に少し残つてゐたものと見えて、近年行つて見たら、  
また一かどの孟宗竹の藪が出来てゐた。そして早春の頃に  
なると、一夜の春雨に、幼い筍が小牛の角の様に、大地を割つ  
て頭をもたげる。をり／＼の總菜の用にも足りる。

東京では、府下の目黒が栗と筍との名所であつたが、今は  
だん／＼開拓されて、そんな田園の趣味は跡形もなくなつ  
た。京都地方は今でも、秋の松茸と共に筍の産地である。京都  
の筍は確かに美味である。松茸と筍との美味なものも道理で、

京都近郊の松の葉の緑と、竹の幹の緑とは、他の地では見られぬ美しさである。京都近郊の山林の美は、この松と竹とである。

自修文

自然の復讐

丘(一) 浅次郎

人類の最も誇とする所は、自然を征服し得た事である。文明と言ひ、野蠻と言ふも、畢竟自然を、多く征服し得たか、少く征服し得たかの相違に過ぎない。火を以て随意に物を焼き、野獸を捕へて家畜とし、雑草を養つて作物としたのも、皆自然の征服であつたが、十九世紀に至つて自然の征服が急に盛んになつて、鐵道を敷いて大陸を征服し、巨船を浮べて海洋を征服し、更に二十世紀に入つては、飛行機を飛して天空をも征服するに至つた。水を用ひ

(一)動物學者、理學博士、東京高等師範學校名譽教授、明治元年靜岡縣に生れた。醫學論講話、煩悶と自由等の著がある。

作物 田島に植ふる栽培植物。

十九世紀

間をいふ。十年

一八〇〇年

一八〇九年

まで。

水を用ひて云

水力電氣のこ

と。

炭を燃やして

製水のこと。

電波を使役し

て云々

無線電信、電

話をいふ。

エックス放射線

普通エックス線またはレントゲンと呼ばれる。西紀一八九五年ドイツの物理學家レントゲンに見られた。一種の放射線である。管内に電氣を通じ、光を透過する。よく透過する。血清を製造して云々

て燈を點じ、炭を燃やして水を造るはもとより、電波を使役して遠距離の間にも自由に通信し、エックス放射線を利用して人體の骨格をも寫し、血清を製造して微細な病原生物を征服してゐる。かくて人類は自然を征服し得た事を何よりの手がらと考へ、文明の進んだ事を大いに得意として、今後益々競つて自然を征服しようとなつてゐる。

しかし、此所に一つの疑問がある。自然は果して斯様に人類に征服されるのみで、敢へてこれに對して復讐を企てる様な事はないであらうか。我々が自然を征服し得たと思つて得々としてゐる間に、白蟻が堂や寺院などを食ひよらせる様に、見えない所で絶えず自然が仇返しをしてゐる様な事はないであらうか。この様な問題は、今日の人類を標準とし、今日の世の中だけを見、目前の勝利に心を奪はれて、唯文明を謳歌してゐる人たちには、

謳歌

ありがたかつてほめたこと

半開時代

野蠻時代から更に進んで半開時代になつた時代

理法のり。みち。

装置

しかけ。こしらへ。

濫獲

むやみやたらに捕獲すること

働き役

働き手。此所では鳥類を指す

漁期

魚のとれる時期

恐らく胸に浮ぶ事さへないであらうが、遠く人類の過去の歴史を考へ、下等な獸類時代、猿時代、野蠻時代、半開時代を経て、遂に現今の有様に達したまでの變遷の跡を探る時は、この問題に對して、確かに「然り」と答へる外に途はない様に思はれる。

自然には一定の理法があつて、これを破る者を必ず罰せずには置かない。例へば、人間の住所たる陸地に就いて考へてみても、森林の樹木を猥りに伐拂つて山を坊主にすれば、雨水を一時吸收し貯蓄する爲の自然の装置がなくなるから、雨降りの續く度毎に洪水が出て、家を流し橋を落すに至る。小鳥類を濫獲してしまへば、昆蟲類の蕃殖を制限する自然の働き役がなくなつて、忽ち害蟲が殖え、作物の收穫が著しく減じ、場合によつては皆無となる。また海岸の森を伐倒した爲に、魚の望んで来る蔭がなくなり、漁期にも魚が捕れず、近邊の町が衰微したといふ様な事もあ

自業自得

自分のした事に對して己の身にそのむくいを受けること

先見の明

さきの事を見抜く眼力

る。工場から汚物を川へ流し出す爲に、その先の海で蝦や海苔が出来なくなつて、土地の人々の産業が絶えるといふ事もある。これ等は何れも、自然の理法を無視した爲に、自然から罰を受けたのであつて、全く自業自得といふ外はない。斯様な過は、今日までどこにでも随分數多くあつたであらうし、また今後も時々あるであらうが、これは知識の足らぬ爲、先見の明のない爲に起つた事であるから、人智の進むと共に、追々同じ過を避ける事も出来、既に過つた事はこれを償つて、その結果を取消す事も全く不可能ではない。人類の征服に對する自然の復讐としては、これ等は最も軽い程度のものである。

生物には、絶えず鍛へる體部は強く丈夫になり、常に蔽ひ保護される所は次第に弱くなる性質がある。これは自然の理法の一であつて、寄居蟹の頭や、鈹が堅いのに反して、介殼に蔽はれた腹

人類開化史  
人類開化の域  
に達するに至  
つた経過を至  
つた歴史を探  
特筆大書  
殊更に大きく  
書きたてると  
煮沸  
にたしすこと  
わがすこと

部の皮が薄く柔かなのもその爲であるが、人間の身體も無論この規則に漏れない。然るに人間は自然を征服し、自然力の一部を随意に使役し得る様になつた度毎に、これによつて自己の身體を大切に保護して來たから、征服の重なる毎に、人間の身體は少しづつ弱くなつた。火を用ひ始めた事は文明の第一歩であつて、人類開化史の第一ページに特筆大書すべき自然の征服であるが、物を煮て食ふ様になつてからは、人間の消化器は著しく弱くなつた。食物を煮て食ふ動物は人間以外には一種もなく、人間程に齒や腸胃の弱い動物も、人間以外には一種もない。衛生の書物を開いて見ると、生水を飲むと危険だから必ず一回煮沸した物を用ひよなどと書いてあるが、まだ火を用ひなかつた頃の人類の先祖は、他のすべての動物と同じく、無論煮沸しない水を平氣で飲んでゐたので、それが今日斯様な注意を要する様になつた

暖房管  
室内を暖にする爲に設けた管

體質  
身體の性質からたのなり  
隱微  
わすかであらばれないこと

のも、畢竟するに、長い年月の間に、人間の腸胃が弱くなつたからである。衣服を著て寒氣を防ぐ事も、他の獸類と異なる點として人の誇る所であるが、その爲、人類の皮膚はだん／＼と弱くなつた。人間の様に僅かばかりの寒暖の變化によつて、容易に風を引く動物は他に恐らくないであらう。家屋を建てて寒暑を防ぎ、市街を造つて安全に住居する事は、すべての文明の礎とも言ふべき事であるが、その爲、日夜悪い空氣を吸つて、呼吸器官が次第に弱くなつて來た。人間が暖房管を備へ、煽風器を据附けて、どんな冬の寒さでも、どんな夏の暑さでも、我が智力を以て防ぎ得ぬものはなからうと誇つてゐる間に、自然はこれに對する復讐として、日夜の別なく人類の體質を根柢から弱くする。かうした自然の復讐は、何時も極めて隱微の間に行はれるから、普通の人はこれに氣が附かぬが、人間の仕事の一時的、部分的、表面的なのに反

普遍的  
のものはすべて  
こと。残る及ぶ  
まなく行きく  
たるはさうし  
性的のさうし  
をいふ質のあ  
る

(一) 詩人、評論家  
名は昌治、明  
治十九年新潟  
縣生れた。湯  
一真寛坊物語  
芭蕉と真寛と  
千代と蓮月と  
郷土に語ると  
の著がある等

(二) 昭和四年三月  
二十七日以後  
この名稱を廢  
して國寶建造  
物と呼ぶこと  
になつた。

(三) 後水尾天皇の  
御代(二二七  
四年)  
棟梁

し、自然の仕事は永久的、普遍的、根柢的であるから、その結果は極めて恐しい。そして一般の學者たちが騒ぎ出す程に結果の現れる頃には、既に手後れて、容易に恢復の見こみは立たぬのである。

### 七 佛の化身

(一) 相馬御風

私は先頃一つのいゝ傳説を聞いた。それは越後の北蒲原郡の乙村まごむらにある乙寶寺おつぼじといふ古刹に參詣した時であつた。その寺には有名な大日如來を安置した大日堂がある。その境内に、先年特別保護建造物として指定された、たまらなくいゝ形をした三重塔がある。かの傳説はその三重塔の建立に關して、語り傳へられたものである。

その三重塔の建立は慶長十九年五月で、棟梁は京都の住

人小島吉正である。その塔の建築には、流石に有名なその棟梁も、心を痛め盡したと言はれてゐる。どう工夫してみても、うまくゆかなかつた。とう／＼彼は工事半ばに、絶望の極、夜逃をしてしまつた。どこへといふあてもなかつたが、彼は唯姿を晦しさをすればよかつたのだ。

彼は眞暗な夜路をたどつて、海岸へと出た。そして海岸に沿うて西へ／＼と歩みを運んだ。眞暗な砂濱に打寄せる浪の音は、時にはこの世に望を失つた彼を誘ふ様にも思はれた。いつそあの暗い波間に飛びこんでしまはうかといふ様な突きつめた思も、幾たびとなく彼を襲つた。しかし、彼はやはり死ねなかつた。彼は唯むちやくちやに闇の中を歩くの



みであつた。

自分の生命をうちこんで工事を進めて来たあの三重塔の失敗は、苟くも藝術を自己の生命とする彼に取つては、正にこの世に於ける彼の滅亡に外ならなかつた。しかも、彼はなぜかうしてその場を逃出して来たか。それを反省する時、彼は我ながらその卑怯を詛はずにはゐられなかつた。自己に對する詛は、やがて自己に對する憎しみであつた。けれども彼はその詛ふべき自己、憎むべき自己を闇の波底に葬つてしまふべく、尙其所に故知れぬ恐怖があつた。さういふ矛盾した心の苦しみは、唯徒に彼の心を狂はせ亂れさせるばかりであつた。今の彼の歩みは、全く狂へる者の歩みに外な

黎明

らなかつた。

彼の心は底知れず暗かつた。しかし、天地の闇は何時となしにほの／＼として、黎明の光に照され始めた。ほのかに明るみかけた大海の面では、先づ波の穂の白いのが朝の光を受けた。やがて彼の前には、果しもなげに續いた廣い砂濱が見えて来た。光は刻一刻と地上の明るさを増して行つた。明離れて行く海には、光を歡ぶが如く波が小躍してゐた。波間に浮いてゐた鷗の胸は、銀色に輝いた。夜露にしつとりとぬれた砂濱に長く／＼續いた彼の足跡、むちやくちやに闇の中を歩いて来た彼自らの足跡——それさへも今は朝の光に照されて、一條の長い路となつて現れた。

さうした朗かな黎明の大地の上に立つた彼は、今は何もかもすつかり忘れ果てて、唯茫然とその美に酔うた。そして倒れる様に、彼は大地の上へ全身を投出したのであつた。それから幾時過ぎたか分らなかつたが、夢とも現ともなく、彼は耳もと近くに、子供たちの楽しさうな笑聲を聞いた。永い眠から醒めた様に、彼はふら／＼と起上つたと、朦朧とした彼の眼の前に、三人の子供が砂上に坐つて、何か頻りにやつてゐるのが現れた。何と言ふわけもなしに、彼はその方へ吸寄せられた。しかし、子供たちは遊に夢中になつてゐるのか、彼の近寄つた事に少しも氣附かなかつた。が、その刹那、その憐な建築師の疲れ果てた兩眼には、突如として不可思

議な輝きが現れた。死んだ様になつてゐた彼の全身には、不思議な生氣が充ち溢れた。

三人の子供は石を澤山拾ひ集めて来て、それを積重ね積重ねして、塔の様な物を造らうとしてゐるのであつた。彼等は今やすべてを忘れて、その事に全心をうちこんでゐる。甲が一つの石を置くと、乙は次に他の一つの石を積む。更に丙がそれに一石を重ねる。代る／＼彼等はそれを續けて、著々として或一つの形を組立てつゝあるが、なか／＼うまくゆかない。積むと崩れる。崩れるとまた積始める。幾度となく失敗し、幾度となく始める。しかも彼等は失望しない。倦まない。止めない。そして遂に或一つの纏つた形が出来上る。すると、

端嚴

彼等は共に手を拍ち、聲を擧げて喜ぶ。そして更にそれを崩して、また新たに始めるのであつた。

さうした三人の子供の遊に飽かず眺め入つてゐたかの絶望の建築師は、或瞬間に至つて、貴い何物かを獲得した様な確信に輝く面もちを以て叫んだ、

「そこだ。その呼吸だ。その組み方だ。」

そしてさう叫ぶや否や、彼は再び狂へる人の如く、もと来た路へと駈戻つた。――

さうした事があつて、漸くの事で出来上つたのが、今日見るが如き端嚴微妙な姿をもつた乙寶寺の三重塔であると、言ふのが、傳説のあらましである。しかも、傳説はそれに附加

化身

へて、その三人の子供は大日堂の大日、薬師、彌陀の化身であつたと言ふのである。

(Blaise Pascal, フランスの數學者、哲學者、西紀一六六二年)



乙寶寺三重塔

「智慧は私たちを子供にかへす。」とパスカルは言つた。私たちは更に「子供は私たちを本當の智慧に導く。」とも言ひ得よう。乙寶寺三重塔の傳説

附會  
權化

は、私にさうした貴い暗示を與へる。「子供は佛の化身であつた。」と言ふその傳説の附會をも、私はそのまゝ受容れるに躊躇しない。さうだ、すべての幼兒は神の權化であり、佛の化身

である。

### 八 親の慈愛

柳澤 淇園<sup>(一)</sup>

#### 一 五月雨

信貴<sup>(二)</sup>の毘沙門堂に四季連歌の句合あり。そのうちに、

五月雨に年中の雨降りつくし

といふ句あり。何がしの大納言聞し召されて、「何者の申したるにか、この句の主を尋ぬべし。」とありける時、高橋何がし、そのゆかりある者に問ひて、かのあたりなる村長<sup>むらぢ</sup>の申したる句なる由答へければ、わざ／＼御使の消息を賜ひて、若し京へも出づる事のあらんには、必ず参るべしとの事故、いと有

<sup>(一)</sup>大和國郡山藩里の重臣。名は里恭。二寶曆八年(一七八八)歿。三、雲津雜志の著である。  
<sup>(二)</sup>奈良縣生駒郡平群村大字。貴畑にある。高き四八〇メ。門堂は、その東にあり。

ゆかり

消息

難くて、かの村長わざ／＼京に出でて尋ね参らするに、「さあらば逢ひて物語せん。」とて、ひと間へ通し給ひければ、村長言ふ、「風流の面目、雲の上までも聞えけん事こそ、いと有難けれど存じ参らするなり。」と言ふに、大納言も四方の話ありて、さて尋ね給ふは、「年中の雨と言へる趣向の面白く覺ゆるからに、その句意を聞きたければ、逢ひ申したり。いかなる故事ありて、かく申せしぞ。」とありければ、村長答へて言ふ様、「別に故事と申すも候はず。唯五月雨の昨日も降り今日も降りつゞけて、明日もまたかく降暮しなば、ひと年の雨もこの頃の五月雨に降盡しぬべしと思はれ候心より申したる外は、所存なく候なり。」と申しければ、「面白く覺ゆるなり。」とて入り給ひ

ぬ。村長が歸りし後、高橋出でて、「いかなる御事ぞ。」と尋ね參らせければ、大納言の仰には、「さりとは、磨が思ひしとはたがへり。五月雨には四時の如く雨の様色々に降りける故、春雨の寂しきにくらべ、夏の夕立にたぐへ、秋の雨のもの凄きにかこち、冬の雨の寒きにもたとへたり。この事古き物語にあれば、それを知りたる句にやとゆかしく尋ねけれども、さはなく、雨の唯降盡すとのみ作りし事故、非興とは思ひぬ。」と仰せられき。

二 長たる者

紀州に豪富なる農家あり。田植の日、早少女凡そ二百五十人餘りも出づるに、その日の朝、田植始る頃、近き山中にて大

いなる鷲の犬と争ひけるが、終に犬をつかみて虚空へ飛上りたるを、他より一人駈來りて、田植の長に言ひけるは、「あれを見られよ、鷲の犬を捕りて空に舞ひたり。」と言へば、その長詞をとめて、「さる事言ふべからず。今苗の植始めなり。衆人この事を知らば、皆大空を仰ぎ見るべし。さある時は、この苗二百五十束程のおこたりなり。」とて、人には語らざりきとぞ。何事にても者の長たる人々、かゝる心掛はありたき事にこそ。

三 世渡る業

木曾の山中など深山幽谷にて岩茸を採るには、ふごといふ物を造りて、綱を附けて、夫はそれに入りて、その妻樹々の

(鯨、鮑、鮑)

(權、舫)

惻隱の心  
すぎはひ

枝より下げて、つりおろし、引上げなどして谷間をあさるとぞ。下は幾丈とも限り知れざる所なる由、見し人物語り。若し過ちて、綱の切れて落ちたらんには、命なかるべし。また伊勢の浦にて海士のあはび採るには、乳呑兒など引きつれて、夫はかいを使ひて舟もやひするに、妻は海底に飛入り、此所彼所貝をもとむるうちに、兒の乳を尋ねてよと泣く聲の水底に聞ゆるにぞ、今一つ得まく思へど、兒の泣く聲の聞ゆるにひかされ、浮び出でて舟べりに取付き、息もつきあへず兒に乳を添ふる有様哀にして、實に惻隱の心も起りぬべし。世渡る業さまざまなる中にかゝるすぎはひする輩もあるものを、家にありてその日を樂に過しつる身は、いと有

難き事にあらずや。

四 親の慈愛

余はいとけなき頃より詩歌の道を好み、偶作文などせしをりから、稿成りて父に見するに、一つとして賞められたる事なく、唯「無益の事なり」とて座右に投捨て置かれ、他の者は見て賞め給へば、さりとはいかゞとのみ思ひ過し、が、後に妻に迎へたる女の、物縫ふ事の人に勝れて、小袖など一日に一襲づゝ縫ひて、餘事までも事缺かねば、物縫ふ職人の見ては驚くばかりに上手なりけり。余、或時物縫ふをひたぶるに愛で賞しけるをり、妻の言ふ、「三歳にして母に後れ、繼母に育てられしが、いと厳しき性質にて、五六歳より水仕のわ

ひたぶるに  
水仕のわざ

(一) 詩人。名は又  
平明。治七年  
堺市に生れた。  
無弦詩塔影。  
霧の醉者詩集  
筆の著者多い

ぎを勤め、七歳より手習、物讀、裁縫を教へられ、『實の子ならねば、教訓足らじと末に至りて譏られんは口惜し。』とて、羽根つく遊だにえせて、唯物縫ふ事などのみに違なかりつれば、をりからははげしき母よと思ひしかども、今となりては物縫ふ業を人に賞めらるゝは、偏に繼母のなさけ薄からざる慈愛なり。』と言へるを聞きて、余がいとけなき頃の作文を賞められざりし事の、いと有難きを思ひ合せぬ。 — 雲萍雜誌 —

### 九 夏の印象

(一) 河井 醉 茗

暮春の感想は暗愁を帯びてゐる。薄い、淡々しい哀愁は行く春の感想だ。

春が行つてしまつて、萬象夏の心持になると、生きるといふ力が張詰めてゐる様で、天然に對する感應が強い。

春の心持は何となく慌しい。花が咲く、花が散る、人が出る、天が曇る、風が吹く、雨が降る、寒くなる、暖くなるといった風に、人も自然も沈著を缺いてゐる様だが、天は緑に、樹は青く、花は根に還る夏の初になると、心持が落著いて、物の「生きる」といふ印象が強くなる。

花でも紅色の薄い花は皆春のうちに咲いてしまふが、燃える様な濃い緋色の花は夏に入つてから咲く。これがまた夏の趣と調和するのだ。

初夏の光線は、盛夏の光線の様に熱烈を極めないが、それ

でも光線の強さは、初夏の色彩を一層赫かしく見せる。初夏の天然のうちで、最も印象の深い物は植物の葉であらう。樹でも、草でも、葉が成育して、新しい緑の色を凝す。一葉一葉の生命の勢も、森に充ち、林に満ち、丘に充ち、山に満ちると、見よ、森は濃やかな色に變る。山は紫を帯びる。雑木林は覺める。覺めた雑木林の色、即ち若葉に射る初夏の日光程、初夏の意味を一般に示す物はないので、古今を通じて詩や歌にも詠まれてゐる。

動物の生活状態の一變するのも、初夏の感想を與へる。胡蝶の種類などでも、春は黄とか、白とか、單色に限る様だが、夏になつて來ると、黒い蝶や、褐色の蝶や、るりの蝶や、斑や、紋の

(増殖)

(虻)

(葵)

大きな物や、様々な色、様々な形の蝶が飛んで來る。蝶ばかりではない、蜂や、あぶや、はへや、羽蟲の様々が飛んでゐる。地にはふ蟲も活動を始める。生きた物の活動が萬象の上に及ぶ。外へ出る時は嫌だけれど、内にゐると梅雨時も面白い。あのじめ／＼と降る雨、雨の中にあふひの莖が伸びる。草の苗が大きくなる。物が腐る。黴る。嫌は嫌だけれど、この後に夏が來るのだと思ふと、地の底へ浸みこんで行く様な雨も面白い。梅雨晴のあの青々した空氣も殊に面白いと思ふ。初夏の頃の朝早く、寒いくらゐるの時に市街を歩くのも面白い。夜が早く明けてゐるのに、都會はまだ寢惚けてゐる様な様をして、しつとりと潤ひのある空氣の底に、消え残つた



市街の燈火などを見ると、言ひ知らぬ心持がする。  
初夏の夕暮も好い。夕暮が永く續いて、暮れさうで暮れな  
い黄昏の色が、物の蔭に漂うてゐる時など、物懐かしい氣の  
するものである。子供などが庭におりて、何かしら歌ひ出し  
たのを聽いてゐると、自然に故郷の事や、自分の幼い時の事  
などが思ひ浮んで來る。初夏の香に誘はれるのであらうと  
思ふ。

—街樹—

一〇 桶狹間の戦 <sup>(一)</sup> 遠山信春

織田上總介信長公、清洲の城に御座ありけるが、近日鳴海  
に出向ひて無二に今川と一戦を遂ぐべし。と仰せらる。林佐

<sup>(一)</sup>傳不詳。總見  
記の外に織田  
軍記、島原合  
戦記等の著  
ある。  
<sup>(二)</sup>尾張國(愛知  
縣)西春日井  
郡清洲町。  
<sup>(三)</sup>同愛知郡。  
<sup>(四)</sup>今川義元。  
<sup>(五)</sup>林通勝。

對揚す

切所

承引

<sup>(一)</sup>永祿三年。(二)  
二二〇年。  
<sup>(二)</sup>知多郡。桶狹  
間の西北約六  
キロメートル。  
<sup>(三)</sup>知多郡。  
<sup>(四)</sup>佐久間盛重。

猿樂

渡守等敵は四萬に及ぶ大軍なり。身方三千の御人數にて、平  
場の御合戦對揚すべき事にあらず。唯この城に立籠らせ給  
ひて、敵を切所に引受けて戦はせられ候べし。と諫め申し上  
げけれども、この儀少しも御承引なし。  
さる程に五月十八日の夜に入りて、敵はや大高に參著せ  
し由、丸根の城佐久間方より脚力を馳せて申し上げけり。信  
長公諸家老を集められしに、軍の評定はこれなくして、唯世  
上の御雜談にて、御酒宴に及ぶ。宮福大夫といふ猿樂、羅城門  
の曲舞をなし、兵の交り、頼ある中の酒宴かな。と謠ひければ、  
殊の外の御感ありて、黄金を下され。既に夜も深更に及べり。  
各宿所に歸りて、したくあるべし。とて出されけり。家老の面

(眩) 智慧の鏡も曇る

(一)知多郡鷺津町。注進

面歸りながらつぶやきけるは、日頃は良き大將なれども、御運の末と相見え、智慧の鏡も曇るやらん、さしたる軍の御工夫も出でぬと見えて笑止なり。」と言合ひて歸りけり。かくてその夜の明くるを待たせ給ひけるが、夜既に明方の事なるに、鷺津の城より注進あり、敵只今鷺津丸根兩城へ人數を取掛け候。」と追々申し來る。信長少しも騒ぎ給はず、「敦盛の舞の、人間五十年、下天の内を比ぶれば、夢幻の如くなり。一たび生を享け、滅せぬ者のあるべきか。」といふ所を繰返し舞はせ給ひて、「さらば螺を吹立て、具足おこせよ。」と仰せられければ、小姓衆乃ち御鎧を奉る。靜かに御物の具を召固め、立ちながら御食を三杯參り、御冑の緒を締められ、太く逞しき

物の具

(一)今名古屋市の内。

(二)名古屋市熱田町。官幣大社熱田神宮。

擁護す

栗毛の駒に召されつゝ、閑々と御出馬なり。御供の小姓衆、御寵愛の岩室長門守を始め、長谷川橋介、山口飛驒守等主従六騎、その外雜兵二百餘人、熱田まで三里の間を一時に駈附け



織田信長

らる。熱田大明神の旗屋口に著かせ給へば、諸勢方々より馳參じて、はやく千騎許になりぬ。乃ち當社大明神へ御參詣ありて、合戦の勝利の御祈願を掛けられ、一通の願書を籠めさせ、やがて社頭より御旗を進め給へば、白鷺二つ御旗の先に飛行くを、「あれこそ當社大明神の擁護し給ふ驗よ。」とて、諸勢をいさめて進まれけり。

(一)熱田神宮の門  
前。俗に智慧  
の文殊と言ふ。

辰の刻

(二)愛知郡呼続の  
南。揉みに揉む  
(三)知多郡有松町。

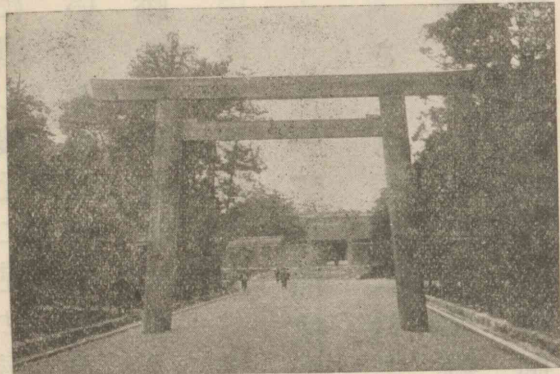
披露

(一)源大夫の宮の前より東を御覽するに、丸根山、鷺津山兩城  
共に落城と見え、黒煙雲に連なりて夥しければ、少しも早く  
駈附けたく思し召す。濱手よりは近路なるに、それさへ今朝  
は満潮差入りて、馬の通ひもかなひ難し。その日の辰の刻に、  
やうく熱田より笠寺(二)の東、上道の細繩手を、揉みに揉んで  
駈けさせられ、道々の砦の人数を召集め、やがて善照寺(三)の東  
の狭間にて勢ぞろひありけるに、漸く三千許なりけれども、  
五千の人数とぞ披露ありける。

さて信長公御軍謀には、敵の先手の大軍を皆本道へ遣過  
して、當方の人数は密に山の陰を廻り行きて、義元の本陣へ  
一度にどつと突掛り、切崩さんとの結構なり。義元これをば

(一)知多郡有松町  
に屬する。勝  
敗を決したの  
は、その北の  
田樂狭間にて、  
三方丘陵を以  
て圍まれた窪  
地である。

(二)佐々政次。  
政の兄。  
(三)千秋秀忠。



熱田神宮

知らず、桶狭間の山下の芝原に敷皮敷かせ、先手の者どもが  
鷺津、丸根の兩城を攻落せしを、大い  
に悦び勇み誇りける所へ、近郷の寺  
社の僧、社人等、悦の樽を進上しけれ  
ば、乃ちそれにて酒宴を始め、謠をう  
たひ興に入る。熱田表には織田方の  
先陣(二)佐々隼人、千秋四郎等、人数二百  
許にて、信長公の御旗を待受け、山際  
に控へゐたる駿河勢へ打つて掛る。  
佐々、千秋小勢なれば取圍まれて、五十餘人討取られ、駿河勢  
誇りて、隼人、四郎兩將の首を取りて槍の先に差上げて、一度

天魔波旬

にどつとときを作る。しかのみならず、信長公の寵臣岩室長門守も拔駈して討取られぬ。佐々、千秋、岩室三人の首を本陣に遣し、義元に見せ奉れば、義元愈、勇み誇りて、某が鋒先には、いかなる天魔波旬なりともたまるまじ」と宣ひて、尙勝軍に驕を極め、酒宴に耽りてゐ給ひけり。

一一 桶狭間の戦 その二

さても信長公は「これより中島へ移りて合戦を始めん」と宣ひければ、人々大將の謀を知らず、池田勝三郎、毛利新助、林佐渡守、柴田権六等御くつわに取附きて、「此所は兩方深田のうち、一騎打の細路なり。これを通り過ぎ給はば、無勢の様體

(一)桶狭間の西北

(二)池田信輝、輝政の父

(三)毛利秀高

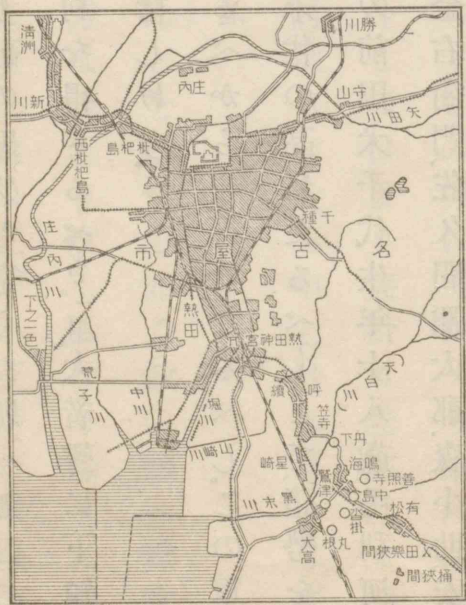
(四)柴田勝家

(轡)

勿體なし

無理無體

敵方より定かに見透かし侍るべし。その上、勝を焦りて、威勢強き敵の中へこの小勢にて向はれん事、勿體なき次第なり。唯切所に待受けて御合戦候べし」と、各諫言申しけれども、無理無體に振切つて、中島へ移らせ給ひ、中島よりまた討出でんとし給ふを、尙もかの面々聲々に止め申しけり。



その時信長公人々を顧て、凡そ合戦の習は、勢の多少によるべからず、殊更この敵は、昨日は大高城へ兵糧を入れ、また

新手  
思ひ切る

安堵す

今朝は鷺津、丸根兩城の合戦に精を盡し、辛苦艱難して、疲れ果てたる人數なれば、大勢と言ふとも猛からず。此方は新手にて、思ひ切りたる軍兵なり。敵の思ひも寄らぬ所へ、無二に掛つて突崩さば、などか勝利を得ざるべき」と、大音聲に下知し給へば、一同げにもと安堵しけり。

(一)前田利家

さて、今日の合戦は、首取るべからず、打捨なるべし。この軍場へ出づる者は、家の面目、末代の高名たるべし」とて、諸勢をいさめて掛り給ふに、先驅の前田犬千代、生年十八歳、毛利河内、森十助、木下雅樂助、中河金右衛門、佐久間彌太郎、森小助、安倉彌太郎、魚住隼人等、高名して、手にく首を持來る。信長公御感ありて、「皆々旗を巻き、忍びやかに山際まで押附け、敵勢

下知す

(一)築田政綱

の後の山を押廻つて、義元が本陣に討つて掛れ」と下知し給ふ。築田出羽守申し上ぐるは、「敵は今朝鷺津、丸根兩城を攻めしより、未だ備を變ふべからず。この分にてかゝり給はば、敵の後陣は先陣たるべし。只今この口より突掛り、差向はせ給ふならば、必ず大將義元を討取るべし」と申しければ、さらばと、忍びて山際を廻らせ給ふ。

(二)愛知郡

俄に大雨降來りて、石などを投ぐる如く、敵の顔へ風吹きかく。敵の爲には向風、身方は後より吹く風なり。餘りに強き風雨にて、沓掛の山の上に生ひたる二がい三がいの松の木、楠の木なども吹倒すばかりなり。これ徒事にあらず、熱田大明神の神軍か神風かなんと言ふ程なれば、身方の大勢

〔森可成。蘭丸の父〕

裏切  
算を亂す

廻り來る物音少しも敵に聞えず。やがて雨の晴間を御覽じ、晴天になるとひとしく、信長公槍追取つて眞先に進ませ給ひ、「掛れ、く」と大音擧げて下知し給ふを、森三左衛門申しけるは、「身方おり立ちて掛るならば、敵きつと備ふべし。唯このまゝ馬を入れて、乗崩し給へ」と言ふを、「尤もなり」とて、毛利新助、林佐渡守、織田造酒丞、築田出羽守、中條小市郎、遠山甚太郎、同河内守等、大將にうち續いて一度に馬をどつと入れ、その勢勇みに勇んで、黒煙を立てて駈破れば、敵陣思ひも寄らぬ所へ俄に掛られ、心ならず後へさつと崩れたり。敵ども餘りにあわて騒いで、「喧嘩か」と言ふ者もあり、「謀叛か。裏切か」と思ふもあり。取捨てたる弓、槍、鐵砲、旗、指物は算を亂すに異なら

しのぎ(鎧)を削りつば(鎧)を破る

〔服部忠次〕

ず。中にも義元の乗り給ひし塗輿を捨置きたり。信長公これを御覽じ、「敵の旗本疑なし。愈、追詰めよ」とて、同未の刻、東へ向いて追掛け給ふ。  
初は敵三百許義元を圍んで退きけるを、手しげく追附けらるゝにより、二三度、四五度取つて返し討死して、次第々々にまばらになり、後にはやうく五十騎許取つて返して戦ふ所を、信長を始めとして、皆々馬よりおり立ちて、若武者互に先を争ひ、しのぎを削りつばを破りて、切先より火焰を出し、散々に戦ひける程に、手負死人は數を知らず。今川義元は無雙の勇者にて、尙これまでも騒がず、諸勢を下知し給ふ所を、織田方の服部小平太、槍を以て突通したり。義元太刀を

したゝか者

なじかはた  
まるべき

抜いて、小平太が膝の口を一刀切割き給ふ。小平太尻居に切附けられて、起上る事かなひ難し。毛利新助來りて、透間なく切つて掛り、義元の首を取らんとす。義元組伏せられて、はや刀にて切る事もかなひ給はず。新助が人差指にかつばとかみ付き、終にその指を食切り給ふ。新助元よりしたゝかなる者なりければ、指を食切られながら、押附けく、義元の首を取る。義元今年四十二歳なり。  
残る敵どもなじかは少しもたまるべき、總軍一度に敗北して、四方八方へ崩れ立ち、後より逃ぐる身方をも、敵の追ふよと見損じて逃散る所を、此所に押詰め、彼所に追詰め、思ふまゝに討取りけり。抑、この桶狭間と言ふ所は、山の狭間、深田

の邊にて、高み卑みうち茂り、足場何れも切所なれば、逃行く者ども一入に途方を失ひ、悉く討取られぬ。身方の若者ども追附きく、首二つ三つづ、討取り、御前へ参りけるを、餘の首は清洲にて御實檢あるべしとて、義元の首ばかりを御一覽成され、御馬の先にその首を持たせ、勝どきを作つて、その日の申の刻に、清洲を指して御凱陣あり。首帳を記されけるに、二千五百とぞ聞えける。これよりしてこそ、信長公の名譽は天下に轟きけれ。

— 總見記 —

自修文

辛抱くらへ

人は我慢が肝心である。ナポレオンも言つた、何でも戦闘は最

Napoleon  
Bonaparte  
年九(西紀一七六  
一八二一

Julyses  
Simpson.

南北戦争の時  
は佐官一八  
六九年大統  
となり明治  
十二年に我  
國に來たは  
西紀一八七  
二一八七八  
年(一)  
(二)米國で奴  
隷廢止の問  
題から西  
紀一八六  
五年(一  
八六五年)  
自敘傳  
自ら自身の  
生を記述した  
傳記

後の五分間の辛抱で勝てる。」と、戦闘のみではない、百事その通り  
で、こちらが苦しいと思へば、あちらも苦しいのだ。我慢くらべ、辛  
抱くらべで、勝敗は分れるものである。  
此所に北米合衆國の偉人グラント(一)と言へば、鬼將軍と唱へら  
れて、南北戦争四年の間に、一度も負けた事のないといふ豪の者  
この點より言へば、ナポレオンより偉い將軍だ。しかし、その自敘  
傳を繙いて見れば、彼もやつぱり人間で、決して鬼ではなかつた。  
グラントは始めて戦場に出た時、一大隊を率ゐてゐたが、こは  
くてこはくて堪らない。しかし、誰も皆初陣(二)の事とて、震へてゐる  
のもあり、顔色の青くなつてゐるのもあるから、指揮官が震へて  
はならないと、大いに我慢をして力んで行くと、先方からも一隊  
の敵兵が進んで來た。これを見ると、その軍容の勇ましき、旌旗は  
空に翻り、銃劍は太陽に閃き、正々堂々と押寄せ來る勢に、一目慄

恐怖心  
おちおそれる

渾身  
全身。



グラント

然とする程に恐怖心が起つた。けれども、男兒一旦死を決して出  
掛けた以上は、固より退くわけにはゆかぬと、度胸を定めて、こち  
らもどしどしと向つて行くと、もはや互に程近くなつたが、雙方  
とも未だ發砲はしない。一體、臆病な者は、見當も定めず、むやみに  
遠方から鐵砲を撃つものださうだが、兵  
法に従へば、成るべく接近してから、一齊  
にはたと撃つのが本當であるさうだ。グ  
ラントは兵學校卒業の人であるから、出  
來得るだけ接近してと考へて、やはり敵  
を見ない時の様に歩を進め、恰も恐怖などといふ事は更に知ら  
ないといふ風に、力みかへつて向つた。すると、兵卒どもは驚いて、  
「何と、我が大將グラントといふ人は、渾身皆膽とでも言ふべき人  
であらうか。我々はあごが震へ、手が震へて、物も言へぬ程怖しく



皆無  
少しも。

なつて来たが、グラントは一向平氣な顔で進まれる。世に鬼將軍とは、實に我が大將グラントの事であらう。」と、感服してついて行く。グラントの心になつてみると、なか／＼鬼將軍どころでない。實は怖氣將軍で、怖くて／＼堪らないのである。まだ接近もしないうちから幾度か發砲しようかと考へたり、または愈、堪らなくなつて、逃げようかと思つたりして、遂には殆ど目も見えず、耳も聞えぬくらゐに逆せ上つて、皆無、分別がつかなくなつてしまつてゐたといふ事である。

然るに、茲に一段面白いのは敵軍の方である。これは南北戦争が終つてからの話であるが、一日、偶然ある所で、グラントがこの初陣に向つた時の敵の大將何某に出會つた。所がその將軍の話に、グラント將軍實に君の大膽には恐れ入りました。かの何年何月どこの戦に、余は初陣の事とて、おづ／＼君に向つた所が、君は

辟易  
驚き退くこと。  
諧謔  
おどけ。

腹藏なく  
心のうちに  
かくす事のない  
こと。

一向發砲もしない、また更に退きもしない。そこで愈、怖氣がついて、餘程我慢はしましたが、とう／＼浮足となつて、君にさん／＼破られました。誠に君の膽力には恐れ入る。その勇武には辟易しました。」と、諧謔交りに語り出すと、グラントは大口を開いて、「これは實に面白い。拙者も實はかく／＼。」と、悉く前條の次第を物語り、「君が逃げ始めたのを見て、やう／＼勇氣を回復したくらゐで、拙者の怖氣は腹より胸に至り、殆ど喉にまで上り、既に息も出來かねようとする有様であつた。」と、腹藏なく當時の己が臆病を白狀して、笑ひ興じたといふ事である。

勿論、幾度も戦場に出て、千軍萬馬の間を往來してからは、こんな事もあるまいが、初陣の時には、いかにもそんなものであらう。さうして見れば、畢竟、少々の辛抱のくらべ合ひで、つい勝敗が分れるものだといふ事は、眞理に相違ない。どうせ死ぬか生きるか

干戈  
たてやほこ。

極意  
わくのて。

(一)山河の末に  
流るゝとちひ  
らも身を捨て  
てこそ浮ぶ瀬  
もあれ一空也  
山人

(二)宗敎家。舊明  
石藩士。安政  
六年(二五—  
九年)播磨國  
に生れた。

(三)詩人、洋畫家。  
明治三十一年  
千葉縣に生れ  
た。爽やかな空  
太陽の娘等の  
著もある。

の場合であるから、唯勇往邁進の一路あるのみと度胸を定めて、  
何でも思ひ切つて覺悟をするのが肝要である。さうして、これは  
決して干戈の戦争ばかりではない。世上は百事戦争である。びく  
びくしてゐると、却つて丸に中つて斃れてしまふ。劍術の極意に  
もある通り、<sup>(一)</sup>身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれで、鬼將軍と言はれた  
グラントですらも、最初は尙この通りであつたといふ事をよく  
考へて、人生勝利の秘訣を此所より學ばなければならぬ。

(二) (松村介石の文に據る)

一一 六月の朝

宮崎 丈二

部屋々々をあけ放て、  
初々しい朝の光の中に。  
爽かな濕りをもつた朝の空氣の中に。

(罌粟)

(苺)

かすかに揺れる草木の戦ぎよ。

けしの花は夢を拂つて

靜かに開き、

微風にも耐へずなよくと

あてやかな姿して立つ。

開かんとして上向に首をのばした蕾

まだ首を垂れてゐる蕾

棘ある夢に固く身を守る蕾の數々。

紫露草は朝の濕りに露を含んで開き、

オランダいちごは敷かれた藁の上に色づき、

三  
萱は添へられた竹に捲きつき、  
測り知れない空間に生命の觸手を延べてはひ登る。

蔓のある草、また蔓のない草。

點々と赤や、白や、黄や、紫の花をつけた草。

まだ生えたばかりの雙葉の草。

繁みの陰からひら／＼と蝶が舞つて來ては、

花々をおとづれる。

群れてゐる蜂やあぶの類、

或は小さな甲蟲の類。

この間隣の軒端で生れたばかりの子雀は、

もう親雀と一緒におりて來て、

餌をあさつてゐる。

翅を震はす可憐な身振、

親雀に寄添つて。

親雀は注意深くあたりに氣を配り、

うまさうな餌をひろつては子雀に興へる。

傍の水盤の中、

もういゝ工合に古びて緑を帯びた水の中には、

子を孕んだ緋目高が點滅する。

庭を圍む葉櫻の繁り。

葉を透かして明るい空と屋根々々。

(一) 歌人。名は繁宮。昭和四年五月、海軍省の嘱託として、海外に遊学し、その著書に『海軍の歌』がある。

屋根々々の向ふには遠く高く  
萌えさかる生命の冠、  
旺溢する森よ。

おゝ、この六月の朝の目ざめの快さ。  
部屋々々をあげ放て、  
初々しい朝の光の中に。  
爽かな濕りをもつた朝の空氣の中に。

一三 山 寺

若山牧水<sup>(一)</sup>

眼が覺めて見ると、雨戸の隙間が明るくなつてゐる。雨はと思ふと、何の音もせぬ。もう寺の爺さんも起きた頃だと、勝

(一) 滋賀縣の琵琶湖。日本第一の湖。面積一、四七〇平方キロメートル。その四方は山に環繞する。西に比叡山、南に西嶽山がある。

手元の方に耳を澄しても、何の音もせぬ。暫くすると、朗かに鳴く鳥の聲が耳に入つて來た。何とまあ、鳥の種類が多い事だらう。あれかこれかと、心あたりの鳥の名を思ひ出して、みても、とても數へ切れぬ程の種々な音色が、枕の上に落ちて來る。私はこらへきれなくなつて飛起きた。そして雨戸を引きあげた。

照るともなく曇るともなく、燻り渡つた一面の光である。見上げる杉の木立は、次から次と唯靜かに押並んで、見渡す限り微な風の氣勢もない。それからそれと眼を移してゐた。私は、ふと、杉の木立の間に、遙かに光る所を見出した。麓の琵琶湖である。どこからどこまでと、その周圍は分らないが、と



比叡の眺望(渡邊公観筆)

夫  
にかく朧々とその水面の一部が輝いてある。

餘りに静かな眺なので、我を忘れてぼんやりとそこらを見廻してゐると、また一つの物が目に入った。眼前からすぐ落ちこんで行つてゐる窪地一帯は、丁度、溪間の様になつて、僅かの間杉木立がとだえて、細長い雑木林になつてゐるが、その藪の中をのそりくと半身を屈めながら、何か探してゐる人がゐるのである。頭を丸々と剃つた大



比叡の眺望(渡邊公観筆)

男の、紛る方なき寺男の聾爺さんである。それを見ると、妙に私は嬉しくなつて、大聲に呼掛けたが、無論彼は振向かうともしなかつた。後庭に降りてかけひの前で顔を洗つてゐると、爺さんは青々とした野生のうどを提げて歸つて來た。「こんな物も。」と言ひながら、筍をも二三本取出して見せた。  
この寺は比叡の山中に残つてゐる十六七の古寺のうち、最も奥にあつて、また最も廢れた寺であつた。住持もあ

(一)延暦寺の本堂。  
 (二)延暦七年(一四四八年)傳  
 教大師の創建。  
 (三)比叡山の最高  
 峰。高さ八二  
 五メートル。  
 (四)京都府(山城  
 國)愛宕郡八  
 瀬村の東。

(五)最澄のこと。  
 近江滋賀の人。  
 延暦二十一年(一  
 〇四六年)唐  
 教を奉じて、唐  
 弘仁十三年(一  
 〇四三年)に  
 寂、年五十六。

るにはあるが、麓の寺とかけ持ちで、何か事のある時の外、め  
 つたには登つて来ず、年中殆どこの寺男の爺さんが一人で  
 留守居をしてゐるのである。四方唯杉の木があるのみで、し  
 かも溪間の行きどまりになつた所にあるので、根本中堂だ  
 の、浄土院だの、釋迦堂だの、または四明が嶽、元黒谷などへ往  
 來する參詣人たちも殆ど立寄る事なく、まる一週間滞在し  
 てゐる間、私はこの金聾の爺さんの外、人間の顔を見る事な  
 くして過してしまつた。

多いのは唯鳥の聲である。大正十年が當山開祖傳教大師  
 の一千一十年忌に當つたといふ舊い山、そして五里四方に  
 亙ると稱へられる廣い森林、その到る所が殆ど鳥の聲で滿



郭 公

ちてゐる。

毎朝きまつて最も早く鳴くのが郭公である。くわつこう、

くわつこう。」と鳴く。鋭くして澄み、しか  
 もその間に何とも言難いさびをもつ  
 たこの聲が、山や溪の冷い肌を刺す様  
 にして響き渡るのは、大抵午前の四時  
 前後である。この鳥の鳴く時、山は全く  
 鳴りを静めてゐる。「くわつ」と鋭く高く、  
 さうして直ちに、「こう」と引くその聲が、  
 ほゞ二つか三つ或場所で続け様に起つたかと思ふと、もう  
 その次には、違つた或頂上か、溪の深みに移つてゐる。暫くも

同じ所に留つてゐない。そして殆どその姿を人に見せた事がない。



杜 鶯

杜鶯も朝が多い。これは必ず最も高い梢でなくては鳴かぬ。この鳥も二聲か三聲しか聲を続けぬが、どうかすると、取亂して鳴きたてる事がある。その時は、例の「本尊かけたか」の律も破れて、全く急迫した亂調となつて来る。日によく照る朝などは、聽いてゐて息苦しくなるのを感じる。この鳥は聲よりも、峰から峰、梢から梢へ飛渡る時の姿が、誠に好い。それから、高調子の聲に混つて、何



筒 鳥

といふ鳥だか、大きさは燕程で、その尾の一尺くらの長いのが、あつて、細々と、實に細々と息を切らずに鳴いてゐるのがあつる。これは下枝から下枝を渡つて歩いて、時には四五羽、その長い愛らしい尾を連ねてゐるのを見る。日が闌けて、木深い溪が日の光に煙つた様に見える時、どこから起つて來るのだから、大きな筒から限りもなく抜け出して來る様な聲で鳴きたてる鳥がある。始もなく、終もない。聽いてゐれば、次第に魂を吸取られて行く様に、寄邊ない聲の鳥である。或時は極めて間遠に、

釣瓶打

或時は釣瓶打に激しく鳴く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれて、どうかして一目見たいものと、幾度も私は木のしづくにぬれながら、林深く分入つたが、遂に見る事が出来なかつた。筒鳥といふのがこれである。筒鳥の聲は、極めて間の抜けたものであるが、それを稍小さく、且人間臭くしたものに呼子鳥といふのがゐる。初め筒鳥の子鳥が鳴いてゐるのかとも思つたが、よく聞けば、全く違つてゐる。山鳩にも似、また梟にも近いが、その何れとも違つた、やはり呼子鳥としての、言難いさびを帯びた聲である。

數へれば際限がない。晴れた朝など、これ等の鳥が殆ど一齊に、其所此所の溪から峰にかけて鳴きたてる。茫然と佇ん

宮嶋の雨 庄田鶴友筆





で耳を澄す私は、身體全體の痛み出す様な感覺に襲はれる  
事が再々あつた。  
——比叡と熊野——

一四 趣味の嚴島

五十嵐 力

趣味の眼から見た嚴島(二)の中心の味はひはどこにあるか  
と言へば、我等は第一に彌山(三)を背景として立つた低い廣い  
美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めた所にあると  
思ふ。

先づ藝州本土の對岸から船を傭うて、ぎい／＼と艫の音  
面白く漕出でる。青一色で塗潰した様な恰好のよい島だと  
思ひながら漕いで行くと、その一色の中から、違つた色彩の

(一)國文學者、文  
學博士、早稲  
田大學教授。形  
明治七年生。山  
縣に生れた。形  
國歌の生れた。形  
發達、軍記物  
語、研究等、著  
力、外、五十嵐  
の集、五巻あり。  
(二)廣島縣佐伯郡  
日本三景の隨  
一。  
(三)島の中央にあ  
る。海拔五三  
五メートル。

社殿や堂塔が、次第に著しく浮出て来る。初には木片を立てた様に見えた鳥居が、だん／＼と大きさを加へて来る。また漕ぐ程に、鳥居も、社殿、堂塔も、益、大きさ鮮かさを加へて来る。そのうちに次第に進んで大鳥居の下に來ると、我等は覺えず驚きの目を見はるであらう。見よ、目の前には高さ九間、棟の長さ十三間、地軸とも天柱とも言ふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨がつてゐるではないか。向ふを見ると、青雲の中に沖つた彌山の麓には、二十幾棟の社殿が美しく左右に延びて、赤い柱や、ゆるやかに反つた檜皮葺の神々しい姿を、水面に映してゐるではないか。その色彩を見よ。形状を見よ。一つ一つの建物の整つた姿を見よ。多くの建物が廻廊や橋に

繋がれて、美しい釣合を表してゐるのを見よ。何といふ美しさ、氣高さ、神々しさであらう。



島 殿

社殿の中心たる本社は寶殿である。寶殿の左右には、百二十七間といふ長い廊下が繞らされて、その間に百八つの神さびた鐵の燈籠が釣つてある。この寶殿を中心として、檜皮葺や瓦棟の多くの建物

が、朱塗の圓柱に支へられて、低く美しく並んでゐる趣。縦向、横向、色々な社殿が仲よく馴染んで、大鳥が翼を広げた様に横長に建つてゐる趣。更に晝は鮮かな色と美しい形とを細

ものくし

(鷗尾)  
(賦)

かに見せ、夜は百八の燈火——白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚長のすくやかな姿を見せ、満潮には波の上に浮んだ龍宮城の幻の様な光景を見せる趣。これ等のすべてが、何とも言はれぬ調和をなして、緑の山と白波の海との間に鎮まつてゐる趣。高さ、大きさ、ものくし、荒々しさは、前後の護衛者たる山や、海や、鳥居に譲つて、社殿自らは、千木も、堅魚木も、しびも、しやちほこもない尋常な檜皮葺を、朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横たへてゐる趣。この重疊累積した美しさ、ゆかしさを、何に譬へようか。

凝視する

立脚點

(一) 建築學者、工  
學博士、東京  
帝國大學、應  
慶大學、三  
年教授、米澤  
市、法隆寺、  
生れた、繪論、  
の著、ある。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんな事を考へる。設計者の鬼神は、海底で出來上つた龍宮城を、嚴島のあの入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。靜かにせり上るのを凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計らつて、此所だといふ所で、びたりとせり上げを中止させたであらう。そしてこれを眺める恰好な立脚點を、今の大鳥居の位置に定めたのであらうと。

——甲鳥園隨筆——

### 一五 日本(一)の風光

伊東忠太

日本が風光明媚な國であるといふ事は、我々國民のお國自慢ばかりでなく、また外國觀光客の外交的辭令ばかりで

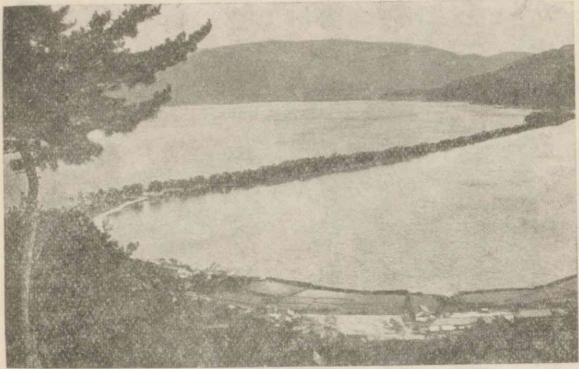
もない。

日本の如く風景に富む國は、實際世界に餘り多くない。唯地理、地質の關係上、その規模の小さいのは遺憾である。

何時からか知らぬが、安藝の宮島、丹後の天の橋立、陸前の松島(一)を日本三景と稱してゐる。しかし、この三つが果して日本に於ける最美の風景であらうか。

勿論風景の美をはかる尺度はなく、見る人の主觀次第で批判されるのであるから、どこの景色が絶対に最優であるとは定め難いが、この三景以上の景色は、日本全國に互つてなら、決して少くないと思ふ。恐らくこの三景の選拔法は、日本本州を中央、西部、東部の三區に分けて、近畿では天の橋立、

(一) 京都府(丹後國)與謝郡吉津村字文殊に  
ある勝景、橋立の北約五〇メートル  
宮城縣の松島灣の内、外に散在する百餘の島の勝景及び灣岸の主觀



中國では宮島、東北では松島といふ風に、各區に一箇所づゝ

特色のある風景を選んだものであらう。或はまた海洋の方面から見て、天日本海で橋立、瀬戸内海で宮島、太平洋で松島といふ風を選んだものであるかも知れない。畢竟、三景は地方代表的の物であらう。

余の觀る所では、日本三景のうちでは宮島が第一である。廻れば七里の浦々のうちで、嚴島神社と彌山とを海上から眺めた所が絶佳である。しかし、瀬戸内海には、單に山と水との關係から

布置

平板

(一)臨濟宗。寛永  
四年(一六二八)  
再興に係る。

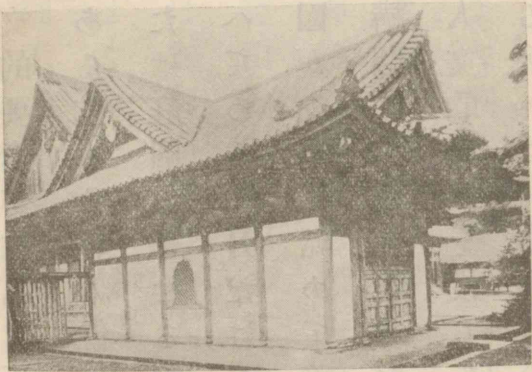
見れば、その規模布置、色調等に於て、宮島に優るとも劣らぬ所は、決して少くない。唯神社の建築物をその間に點じて風景を引締めた點に於ては、恐らく宮島に及ぶ物はなからう。日本海の沿岸は概ね平板で、奇拔な風景に乏しい。この間にあつては、橋立はその選に入るべき資格を十分に備へてをる。橋立の智恩寺(一)に於けるは、宮島の嚴島神社に於けるが如き重大の意味を有しないが、尙丹後の國道に當り、橋立の行路を扼し、橋立と併存して離るべからざる關係にある。即ちそれは、自然の風景に人工の美を點じたものと解する事が出来る。松島の景色は海と島とを取混ぜた平面的なものであつて、その全景は山の頂からでなければ展望する事は

き

出来ない。景色が稍散漫で中心がなく、随つてその印象は淺

(一)臨濟宗。鎌倉  
時代の法興寺  
達と其の再興  
寺の装飾。華  
外荘の藝術。中  
莊の美術。見  
稀なる所。

構圖



瑞巖寺

く、且弱く、宮島程の深さと強さとは  
ない。松島の景色に點ぜられた人工  
の景物は瑞巖寺である。寺は松島に  
よつて名高く、松島は寺によつて名  
高い。

以上(一)の如く比較して見ると、日本  
三景は、三者各その趣を異にしてゐ  
るとは言へ、何れも海を取入れた景  
色であつて、畢竟、同一種類に屬する物であると言つてよい。  
風景の美は、若し自然の構圖が極めて巧妙に出来てゐた

た

(一)石山の秋月、  
瀬田の夕照、  
粟津の歸帆、  
三井の鐘、  
唐井の雨、  
比堅の暮雁、  
真田の落雪

(駱駝)

ら、これに人文的要素を點ずるに及ばず、また點ずる餘地もないわけである。しかし、普通の場合には、やはり何等かの人文的要素が點出されて、始めて風景は引締められるものである。尤もそれが餘りに多ければ却つて風景を俗化させ、または庭園化させる。例へば、近江八景の中に石山の秋月を數へてゐるが、月だけでは景にならぬ。石山寺といふ人文的素因が加つて、始めて美を成してゐるのである。壯大な自然の構圖でも、餘りに壯大では風景にならぬ場合がある。この時、人文的素因を投じて中心點を作れば、始めて風景になり得る。例へば、一眸千里の沙漠は、風景としては寧ろ索漠たる物であるが、其所に遙かに一群のらくだの列が點出される時、

小細工を弄する

好個の畫面となる。更に若し、らくだの鈴の音が風につれて斷續して聞えるならば、一層幽情を深からしめるであらう。また例へば、萬丈の峻嶺が雲を破つて屹つ姿は、それだけでも實に雄壯である。しかし更にこの山嶽に伴なふ何等かの神祕的傳説を想ふ事が出来るならば、非情の土石も、有情の靈山として觀る人の心を魅するであらう。この場合に於ては、無形の精神的、人文的素因が加つたのである。舊日本三景はこの點から見て意味の深長な物がある。近江八景には小細工を弄した點もあるが、とにかく味はふべき所がある。それ等に比べると、新日本八景中には、美しい物もあるが、物足らぬ物がないでもない。

(一) 畫家、小説家、  
本名は壬生馬  
濱治十五、  
明の市に生れた  
嘘の果、  
の秋、  
著ハザンヌ等  
のののののの  
著ハザンヌ等

雰圍氣

一六 桃源郷伊豆の大島 有島生馬<sup>(一)</sup>

大島の自然は寧ろ單調で、貧弱の感じを起さざるを得ない。殊に淡水の缺乏と火山灰の地層とが、その感じを深くさせてある。しかし、それ等を補うて尙餘りあるものは、その氣候のいゝ事である。冬でも五六度を下らないし、夏でも平均三十二度には上らない。この海洋氣候のもたらす恩恵が、様々な事に深く影響して、特殊な雰圍氣を作つてゐるのである。植物にも、人體にも、人事にも。

一例を言へば、あしたば、たがやなどいふ青々した、いかにも旨さうな牧草が一年中繁茂する。その爲、大多數の島民は

(Butter.  
(牛酪)  
Tanseln.



島 風 俗

牛を飼ふ。その結果、内地では見馴れない様々な構圖が描かれる。或時は農家の裏庭に、或時は山腹の野原に、或時は搾乳場に、晝間は固より、時としては暗夜に、この優しい目を有する家畜と村人との親しい組合せが見られる。悠長な鳴聲も到る所に聞える。その乳は飲用としては殆ど無代價の有様であるが、<sup>(一)</sup>バター、煉乳原料、乳糖、カゼインなどに製せられるから、一日二三圓になる。それによつて婦女子は樂々と獨立の生計を營む事が出来る。

(二)静岡縣(伊豆  
國)田方郡熱  
海町

氣稟  
敢爲

牧牛の影響はこの外にもある。我々は純良な牛乳を得ると同時に、旨い子牛の肉をも十分に供給される。その上、直接東京から来るパンに新鮮なバターを副へて食ふ事が出来る。先づこれ等の食物から言ふと、旅客は歐洲の田舎にゐる様な心持がする。新聞も鎌倉、熱海邊とは違つて、市内版が届く。私に取つて一番興味の中心になる物は、やはり島民その物である。言語、風俗、建築、習慣、生活、産業、社會組織、道德、宗教など、皆一種の特色を有してゐる様であるから、これ等を子細に観察したら、それ〴〵面白い點があらう。島民の體質と容貌、心狀と氣稟、これ等には最も驚かされた。體質は優良、容貌は端麗、心狀は健全安定、氣稟は快活、敢爲、そして勞動を愛す

六

る。こんな抽象的な言葉を並べただけでは實況は髣髴すまいが、とにかく、彼等の生活くらゐ樂園の住人に近いのは、他に澤山はなからう。そしてこんな原始的な住民をもつてゐる事、それが大島の桃源郷たる第一の原因である。

大島が伊豆、相模、安房の沿海に位しながら、近年まで全く内地の文化と没交渉で、特殊な個人、特殊な社會を作つて來た事は、世界に於ける一奇觀といふ事が出来よう。どこの國のどこに、こんな不思議な現象が見られよう。單に交通が不便だつたといふだけでは、とても説明しきれない程、他とは異なつてゐる。私にはその原因がはつきり分らなかつた。所が、私が島に行つた時、或故老から次の話を聞いて、略その原

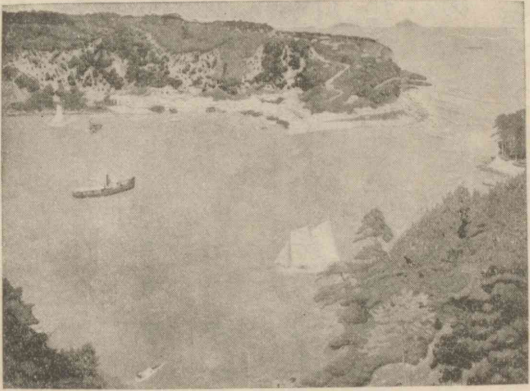
故老

を



因が明らかになつた様に思へた。

それは、舊幕時代に甚だ妙な一つのおきての布かれてゐた事である。このおきては幕府側から言へば、島民に對する特殊な厚意的保護といふよりも、一種の皮肉な政策に過ぎなかつたのだらう。そのおきては、たとひ難破船、漂流者が寄つて來ても、若しそれが本土人だつたら、一物をも與へないですぐ追拂へ。但し、<sup>(一)</sup>利島<sup>(二)</sup>新島<sup>(三)</sup>などいはゆる伊豆列島の住民だけは、除外例として、炭水を供給してもよい。



浮波港 (藤村茂筆)

(一) 伊豆七島の一周約一〇キロ  
 (二) 伊豆七島の一周約五十キロ  
 (三) 伊豆七島の一周約二百八十キロ

(掟)

(一) 詩人。名は圓吉。明治十六年。岡山縣に生れた。榮光の著書「あみ踊る」を著した。

べてこんな有様だつたから、交通、貿易、移住などは絶対に禁ぜられてゐたのである。この驚くべき慘酷な鎖國主義のおきてのあつたといふ事實で、始めて其所の生活の原始的なもの、島民が一種固有な特別の發達を遂げたのも、稍明らかになる。

一七 朝の歌

しらぐと明けゆく  
 あけぼのの光。

南國の空にたゞよふ  
 淡緑の雲を刺す

(一) 人見東明

朝明けのしづけさ。

温い者の腕かひに抱かれる

もの懐かしい夢の

あけぼのの一時。

ゆるやかに寄せる波の

渚邊を見よ、

濱はひとすぢに涯もない。

舟人よ、

入江に眠る舟のとまをあげよ。

起出でて

いざ、／＼、ともに朝の歌を唱はう。

浮き沈みする水標かの額には、

鷗の夢が残る。

もの静かなるあけぼのの

渚をのぼる

白い光線のたゆたひ。

いざ、／＼、起出でて

あけぼのの歌をほがらかに。

すでに小鳥は

はるかなる空の上で――。

自修文

趣味の日記

徳富健次郎

七月一日 「今年も半ばは過ぎにけり」と隣の女兒唱ふ。

三日 半夏生籬の楓枯れし後に女竹五竿植う。

今植ゑた竹からもくる嵐かな

とは古人の句。雨そゞぎてばさく。木には見られぬ趣深し。

八日 三日月清し。日暮始めて近きあたりの大えのきにひぐ

らしの聲を聞く。

十三日 隣家の翁、杉籬ごしに「大山水の花咲きたり、見に来よ。」

と言ふ。行きて見る。葉は讓葉の如く、花は白木蓮を三つ四つも合

せたる程にて、芳香譬へん方なし。富麗にして、しかも品高き花な

り。

(一)小説家。蘆花と號した。熊和本縣の人。昭和六年歿。自然と人生、思ひ出の記、不如歸、ことづのたは、みづの著、全集二十卷に収められてゐる。半夏生。夏至より後十日。七月十二日頃に當る。日暮。日のくれ方。夕方。ひぐらし。茅畑。蟬の一種。

(一)頼山陽の居所に附けた雅名。河原は賀茂の

(二)東京市澁谷區澁谷町。

(三)耐。

心得顔。得意さうな様子。

(四)たて科。夏秋の頃、路傍に咲く雑草。花は淡紅色で小さい。



大山水(筆邦廣幡川)木

十六日 去年近所の林より掘來りし山百合始めて開く。

十七日 嫁菜の花一輪咲く。こは去秋京都に遊びて、山陽先生の山紫水明處の下なる河原より掘

りて來しなり。立ちて見る程に

みづの音も心も

ともにすみゆきて

月しづかなる

賀茂の夜半かな

と詠みしそのをりの情興、水の如く

胸に湧く。午後澁谷の川にふな釣に

行く。水増りて青蘆を没し、川柳の偃

して小さきアーチを造れるを、心得顔の水馬ついで、潜り行け

ば、いぬたでの花搖ぎて、小さき蛙ざんぶと水に飛びこむも興あ

(一) 菊科の一年生  
草本。高さ一  
二尺。花は貝  
殻細工に似  
て、晴れば開  
き、雨降れば  
つぼむ。

心に染む  
感心する。

夙起  
朝早く起きる。

ぬれそぼつ  
びつしよりぬ  
れる。

(桔槔)

(二) 國文學者。明  
治十八年東京

市に生れた。  
沼のほとり。  
菩提樹の蔭等  
の著もある。

おのが領でな  
い。自分の世界で  
ない。蛾は多く  
夜出るので  
いふ。

玉をぬく  
と。玉をつるこ  
と。  
たるむ  
ゆるむ。

り時々雨ざあとしぶきて、風景見る／＼淡墨の畫になり行く。傘、  
蓑笠、其所此所に見えたれど、獲物ありとも思はれず。余も一尾だ  
に得ず、ふとにさゝれて歸る。

二十日 朝の程日影さし、貝細工の花美しく開く。やがて曇り  
しかば、乾びたる鱗々の花瓣、見るがうちに蓄む。萬年草とも言ひ  
て、盛の時に摘みて蕊をだに去れば、萬年も色を保つといふ花な  
れば、少しの濕氣をも厭ふにこそ。心に染む事かな。誰か汝にかく  
自ら愛惜する事を教へし。

二十五日 晴。夙起。小園を歩すれば、杉籬の蜘蛛網露を帯びて、  
白絹の光あり。撫子花、ひあふぎ、百日草、千鳥草、桔梗、日まはり、金蓮  
花など露にぬれそぼちて、夢未だ醒めじと見ゆ。夕方、かば色の雲、  
西隣のはねつるべの梢に浮びて、ひぐらしの聲涼し。

二

(二)

中 勘

助

七月一日 若竹の幹に、片側ばかり白く光がさして、片側は蔭  
になりながら、それも漸く薄れて行くのを見れば、夏ながら身の  
冷える様な寂しさを覚える。をり／＼吹きぬけて行く風に運ば  
れて、竹の葉が部屋の中まで散りこんで来る。それも寂しい。障子  
の棧にこつそり息を殺して、おのが領でない「畫」の過ぎて行くの  
を待つてゐる小さい蛾の卵色の翅。それも寂しい。  
二日 しと／＼と雨が降つて、しづくが音もなく竹の幹を流  
れる。軒に張つた蜘蛛の巢は無数の玉をぬいて、干された網の様  
にたるんでゐる。南天の葉にもころ／＼と露が溜つた。あちこち  
の木の根に菌が鮮かな傘を並べた。机の上にはゆふべ出して見  
たまゝに、小さい玩具の籐椅子が載つてゐる。人懐かしい日であ  
る。裏の枯木の森で鳶が休みなしに鳴いてゐる。  
二十六日 雨があがつて、日がまた燃える様に照り始めた。昨

黒い縞のある  
云々  
大きい黒い縞  
のある蝸牛の  
殻をわう言つ  
たのである  
念ずる  
ふれふ。おも  
微明  
うすあかり。  
神妙  
殊勝。すなほ。  
鳴りを静める  
静りにするこ  
と。

正覺坊  
海龜  
高き三四メ  
トル。花は色  
も形も桃に似  
て夏の頃開く。  
(蜥蜴)

日一日縁側の柱を歩いてみた蝸牛は、今日はその中程にびつたりと吸附いてゐる。彼はあの黒い縞のある天幕の中にちよこまつて、沙漠で渴に惱む旅人の様に、雨、雨、雨と、雨ばかり念じてゐるのであらう。彼に似て微明と涼氣とを愛する者は、まはりの森に住む無数のひぐらしである。彼等は日のうちは神妙に鳴りを静めてゐるが、明方と暮方、日中も夕立の雲などかゝつて、俄に薄暗くなる時などは、それとばかりに、一齊に歡呼を擧げる。

この離の後になる奥庭の隅に、こんもりと群立つてゐる寒山竹は、ぎら／＼と陽炎の立つ土の上に、眞黒に影を落してゐる。時皮がはがれて、綿密に立つた幹の間に滑り落ちる。その上には光と熱とに鬱した空を、正覺坊みたいな雲の塊が、ぶかり／＼と漂つて行く。傍には夾竹桃の花が咲いてゐる。綺麗な雑色の尾をもつたとかげが、鱗だつた錢苔に腹をすりながら、すばしこく蟲

てらつく  
照り輝くこと。

をなめて歩く。その身體がなめ／＼とてらついてゐる。窓をあけて横になりながらそれを眺めてゐると、蚊蚊が汗の臭をかぎつけて、何時の間にか足先を刺して行く。あと竹がぶくりと腫れて、いら／＼した夏らしい刺戟を感じる。



(筆雲祥井有) 桃

門内の眞紅な芙蓉は、眞夏の日光を浴びて、火の様に咲いた。その色に慕ひ寄る熊蜂の細い翅も燃える様に震へてゐる。四十雀の子が親に連れられて、枝から枝へと渡つて歩く。時々見やう見眞似にひとりて餌をつゝいたり、嘴をといだりする。

(一)小説家、文學博士。名は成行。慶應三年(二五二七年)江戸に生れた。五重塔に洗心打露つ浪塔全集の著件ある。

### 一八 樂地

幸田露伴<sup>(一)</sup>

いかなる所にも樂しき地はあるべし。またいかなる所にも樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、快き事のみ懷に滿つべくはあらず。旦の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒さに怯ゆる事もある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎えかゞむ冬の時に當りても、うら悲しき事のみ胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のあたりに罪なき話の興を湧し、ぬく灰

興を湧す

金殿玉樓

茅居草屋

はたく焼芋の暖きに笑むをかしさもあべし。金殿玉樓にも樂しからぬをりはあるべく、茅居草屋にも樂しき所はあるべし。事物は大凡唯一向ならぬものなれば、いとく樂しからぬが中にも、樂しき所、樂しむべき所もあるべきなり。樂しき所、樂しむべき所を見出し得れば、いか程窮苦不快の中にありても、人はおのづからに勇氣を得て、苦中の苦に耐へ忍び、やがて人上の人となり得る事もあるべし。さなきまでも、樂しからぬが中に樂しき地を見出さん事を常に心掛けて、その習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も闊く、氣も豊かになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過す様にもなるべし。努めて樂地を見

身に賦す

行商

身すぎ

出す習慣を身に賦せんと心掛くべし。

昔、或江州の行商人と他の國の行商人と、共に碓氷の坂路を上り行きけるをり、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩高く重かりければ、二人共憊れ苦しみて憩ひけるが、苦しきの餘りに、江州のならぬ商人、碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬはなけれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて、歸り去らんとしも思ふなり。」と溜息つきて歎じけるに、江州の商人うち笑ひて、「坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむ程は我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我はしか思はず。この碓氷の山を十程も重ねたる高さ山もあれかし。さらば數

多き行商人は、皆半途より身も憊れ心も弱りて歸り去るべし。その時、我一人いかにもして山のかなたに到り、思ふがままに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ。」と言ひけりとぞ。

同じ苦難の中にありてもよく樂地を觀る者は、身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀。よく／＼思ひ味はふべきなり。

— 洗心録 —

身撓んで心撓まず

一路兩人  
一境兩狀

(一)醫學博士、理學博士、ドクトル・オブ・サイエンス、ロックフェラー醫學研究所部長、昭和三年歿、年五十三  
(二)Rockefeller.

### 一九 偉人野口英世

「細菌學者野口英世の死に依つて、我がロックフェラー研究所は、その最も卓越せる獨創的科學研究者の一人を、その最

も敬愛されてゐる共働者の一人を失つた事を、世界の凡ての人々と共に痛惜する。」

(Acra. Africa) アフリカの黄金海岸に面する小邑

聲明書

(Morning Post) アメリカのモーニングポスト紙は

濟世

世界の醫聖と謳はれ、全人類の慈父と仰がれた野口英世博士が、西アフリカ、アクラの海岸に恐るべき黄熱病研究の犠牲となつて倒れた翌日、博士が籍を置いたロックフェラー研究所は、世界の學界に向つて以上の如き聲明書を發表した。博士は日本に生れたとは言へ、その功績よりすれば全人類のものである。博士の勇ましい獻身的生涯は、現代の範とするに足る。眞に博士の抱いてゐた理想は、自分を犠牲にして濟世の道を歩んだ聖者のそのの如きものである。」

世界人

文獻

(John. Davison, Rockefeller) 西紀一八三九年一月九日生れた。額に七、七、七の数字を記し、人類の幸福を増進するの目的を興した。

と、その長逝を哀惜した。

誠に博士野口英世は、日本を郷國とする世界人であつた。國境を越え、人種を超えて、研究貢獻した博士の卓越した學



野口英世

勳は、千載遠く傳ふべきものである。

博士は病理細菌學の專攻學徒として、その研究の範圍は殆ど全世界に亙る廣汎なもので、研究發見の報告は實に百七

十五篇の多きに上り、その多くは不滅の文獻として、全學界の至寶となつた。

博士が終生の研究道場としたロックフェラー研究所は、アメリカの富豪ロックフェラー氏の美舉に依つて設立されたもの



Simon  
Flexner,  
ドクトル・オ  
ブ・メヂシン、  
ロックフェラー  
醫學研究所長、  
米國學術會議  
委員長、(西紀  
一八六三年)

鏤骨彫身

で、現代科學界に雄飛する醫學の王國の觀がある。此所に集められた醫學者は、悉く各國の醫學界に萬丈の氣を吐く權威である。野口英世博士は恩師フレキシナー博士に選ばれて、その創成の業を輔けた。たとひフレキシナー博士にその異常の天才を早くも認められたとは言へ、また學界多年の謎であつた蛇毒の研究にアメリカの科學界を驚歎させたとは言へ、異邦白面の一醫學者が、かうした所へ乗出して來た事その事は、アメリカ醫學關係者の驚異の的であつたに違ない。時に博士は尙二十八歳の弱齡であつた。爾來二十餘年、博士の鏤骨彫身の努力は、醫學者としてのあらゆる最高の名譽を贏ち得るに至つたが、到底人間業とも思へぬ程の

驚くべき精力と智力と根氣とをこめたその廣汎深遠な研究發見の跡は、いかなるこの世の讚辭を以てしても語り盡し得ない。

フランスの一新聞紙は博士を讚へて、日本の生んだ近代の驚異」と言つた。事實、超人間的の偉大なその業績は、博士の生涯を飾つて永遠に輝く。それと共に、日本人が學術的に世界を壓倒し得る事は、博士に依つて明らかに立證された。科學にとかく冷淡な傾のある日本人の中に、圖らずも博士の様な偉人が出現したのである。されど博士を生んだのは日本の國土であるが、彼を磨き彼を鍛へて、限りない光榮を人類愛の上に享けしめたものは、實にロックフェラー研究所であ

つた。これを思ふ時、科學の尊重を高唱する心が頓に湧き、科學者に對する敬意を昂むべき必要を痛感するのである。

博士は地球を墳墓として冷徹明澄の理性を深め、苦闘精進した科學の使徒であつた。しかもその餘影には、聞くもゆかしい數々の挿話がある。博士は生涯日本人である事を誇つた。そして故國をしのび、郷黨を思ひ、殊に骨肉を慕つた。日本を出でて十六年、繁劇な公務に縛せられ、勃々たる研究心に驅られて、日本學界の幾度かの招聘、先輩知友からの切なる懇慫にも應ずる事が出来ず、遂に歸朝の機會を捉へ得なかつた。博士は、一度故國から送られた一片の年老けた母堂の小影に接するや、倉皇として歸來し、故山に母堂の健在を

冷徹明澄

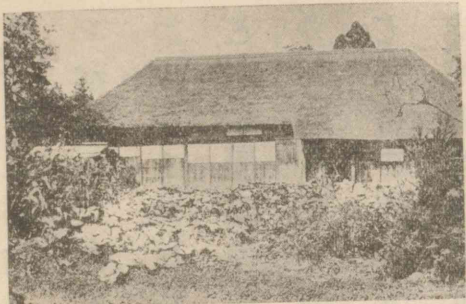
使徒

骨肉

懇慫

倉皇  
故山

(一)福島縣(岩城  
國)耶麻郡猪  
苗代町



野口英世の生家

喜んだ。博士はまた舊恩の人に絶大の敬意と感謝とを常に捧げた。その少年の頃、學僕となつて恩寵を受けた舊師に對しても、既に學界の高き權貴に立つ博士は、尙生涯昔ながらの呼捨を以て呼ばれる事を求め願つたといふ。或は母校猪苗代高等小學校以來、薰陶後援到らざる所なかつた良師に對しては、「自分は若しかの人に見出されなかつたら、牛追太郎で一生を終つたであらう。」と、終生その恩に感謝したといふ。これ等は共にその人格の麗しさと清らかさとおのづから感じさせる話柄ではないか。

(1) Ecuador.  
南アメリカ  
北部の共和國  
(2) Guayaquil

(3) member.

やしの森繁る南米エクスアドルのギヤキル市に立つ青銅の標面に、

「一千九百十八年七月二十四日、ロックフェラー研究所のメンバー、ヒデオ・ノグチ——日本の細菌學泰斗——黃熱病の原因を此所に始めて見出す。」

とある。先驅の勇者は業半ばにして悉く倒れたが、南アメリカ大陸百千年の繁榮の途は、かくして開かれた。けれども同じ熱帯の西アフリカに更に兇惡な黃熱病が猖獗を極める時、博士野口英世は敢然としてこれが征服を志し、傷ましくも天職に殉じた。人道の父はかくして人類愛の前に、悲壯な犠牲となつたのである。

猖獗を極む

天職に殉ず

偉人野口英世。その生地は福島縣耶麻郡翁島村といふ猪苗代湖畔の一寒村である。

二〇 今

(1) 市 島 春 城

私はいくら字書を繙いて見ても、「今」といふ字より、より以上の力強い字を發見する事が出来ない。古來の賢哲、能く百代の師たり、萬世の範たる金言を遺したと言つても、「今」といふ語以上に力強い語を案出した者はない。正にこれ七首肺肝を穿つの語である。人生唯「今」あるのみ。昨日は去れる、「今」であり、明日は來らんとする。「今」である。回顧は過去つた事に對するものであり、豫想は假設であつて、我等にあるものは、唯

肺肝を穿つ

(1) 實業家、學者  
元新聞記者。萬  
名は謙吉。二五  
延元(一)越後  
に〇年(二)五  
城隨筆、陽、隨  
一城隨筆、陽、隨  
が夕話等の著

「今」のみである。日月は移り、動植物は代謝し、天地は須臾も息まない。そして刻一刻推移し行く「今」こそ宇宙の本體である。これを我等の日常に見るも、「今」といふ瞬間程大切な時はない。事の成るのも敗れるのも「今」にある。この瞬間こそ髓の底までも振り起す力がある。「今」の外に既往と未來とがある。かに見えるが、畢竟、既往は「今」の葬られた殘骸であり、未來は「今」のまだ生れない陰影であつて、其所には何物もない。既に葬られた既往を語るのは、死兒の年を數へる様なものであり、まだ生れない來年を語れば、鬼が笑ふと言はれてゐる。既往は追ふべくもなく、未來は期し難い。唯根強く迫り來る力は「今」といふ一瞬にあるのだ。既往に善なるもの偉なるもの

があつたとしても、それはその當時の「今」に於て成つたものだ。更に再び善なるもの偉なるものを求めようと欲したならば、「今」これを爲す外はない。

今日しなくても明日あると言ふが如きは、天地不息の大道に背くものである。これを未來に期すと言ふ如きは、永へにこれを失ふと言ふに同じい。特に未來といふ別境地の存するのではない。「今」——現在の推移……これやがて未來である。未來に期すと言ふのは、畢竟、薄志弱行者の遁辭に過ぎぬ。未來などいふ空虚を假定するのは愚である。何ぞ直ちに起つて今これを爲さざる。期し難い假定に遁れるのは、その優柔怯懦を自白するものでなくて何であらう。

故に私は全力を「今」の一字に注ぎ、斷として「今」の一瞬を守る。一人の生涯、一國の運命、唯「今」に全力を傾注するに於て、始めて大成が期し得られるのである。「今」を外にして競争場裡に立つ事は難い。闘は「今」である。勝敗は「今」の一瞬にある。「時は今」と叫ぶ時、其所に果斷の決心があり、剛健の意氣があり、直截の邁進があり、奮闘の努力があり、その間一毫の惰容を赦さぬ。かくして全力の發動となり、渾身の熱血となり、精神一到して大事が成るのである。私は一意「今」を禮讚する。

昔、黒田如水は豊太閤の偉業を思つて或時問うた、「殿下の成功には必ず秘訣があるではありませんか。願はくはそれを承りたい。」と。豊公は笑つて、「別に秘訣はない。唯過去を追はず、未

(一)父宗淳に茶道を善くした。元伯まは元叔と號する。萬治元年(一八八一年)歿。  
(二)今京都市上京區。臨濟宗大徳寺派の本山。  
(三)大徳寺の住僧。近江の人。書畫を善くした。寛文元年(一七二一年)歿。年七十四。

別懇

來を慮らず、今日一日の事業を一心不亂に爲したに過ぎぬ。」と答へたとあるが、豊公も「今」の禮讚者である事が知れる。英雄豪傑の事業も、「今」の成功の積まれた物であるのだ。

私は「今」といふに因んで、更に茶人千宗旦の一遺事を語らう。

宗旦が新たに茶室を建てたをり、豫て別懇の大徳寺の名僧清巖和尚が、多分普請も落成に及んだであらうと尋ねて來た。宗旦は悦んで迎へ、「普請は漸く成つた。どうか庵號を考へて下さい。」と言つた。清巖は「いかさま尤もの事だ。しかし、何ぞ好みはないか。」と問うた。宗旦は暫く考へ、「古語に『懈怠の比丘明日を期す。』とあるが、いかにも面白く思ふ。」と言ふと、清巖

はうちうなづき、成程面白い。人間の生涯は明日も知れぬ事だから、庵號を『今日庵』とされてはどうか。それでよければ額字は揮毫しよう。」と言ふと、宗旦はひどく悦んだ。さて種々の物語に時も移つたので、清巖が暇乞して去らうとする時、宗旦は引留め、「今此所で額字の御揮毫を。」と需めた。すると和尙「いや、それは餘りに倉卒。追つて認めて進じ申さう。」と言ふのを、宗旦「然様にては今日庵の意にかなはず。只今此所ですぐお書き下されてこそ今日庵だ。」と言ふと、清巖も尤も至極と筆紙を求めたが、即座に唐紙や筆を辨じかねた。紙は僅かに障子の張残りを見出したけれど、筆のないのに當惑した。をりから傍にゐた妻女が眉掃を取出し、「こんな物で間に合ひ

ますなら。」と言ふに任せ、清巖は立所に「今日庵」の三字を書いた。これが千家に名高い額面である。清巖が揮毫を果して歸院すると、程なく宗旦から使があつて、「茶を進ぜたい御座いますから、只今すぐお出を願ふ。」とあつた。清巖は不審を抱き、つい今まで話してゐて、そのをり何のさたもなかつたのに、妙な事だと思ひながら、直ちに出掛けると、先刻書いた額面は、針で留めて壁に掲げてあつて、宗旦は茶室開の茶を點てた。その日を越さず即日茶をふるまつた所に、宗旦の趣向がある。今日庵といふ以上は、かくなければならぬと、清巖も感に入つたとの事である。

(一)平安時代の歌  
人。世に堤中  
納言といふ。  
承平三年(一  
五九三年)歿。  
年五十七。

(二)平安時代の歌  
者。古今集撰  
平九年歿。

(三)江戸時代の歌  
人。京都の人。  
享和元年(一  
七九一年)歿。  
年四十九。

二一 明倫歌集より

ひとの親の心は闇にあらねども  
子を思ふ道に惑ひぬるかな

(一) 藤原兼輔

秋の日は山の端近し暮れぬ間に  
はゝにみえなん歩め我が駒

大江千里

なかりしもありつゝ歸る人の子の  
ありしもなくて來るが悲しき

(二) 紀貫之

惜しからぬ命ながらもたらちねの

(三) 小澤蘆庵

(一)菊池武時。元  
弘の勤王家。  
元弘三年(一  
一九三年)博  
多で戦死した。  
年四十二。

(二)江戸時代の大  
儒。寶永二年  
(一七二五年)  
歿。年七十九。

(三)白河の城主。  
學を好み、和  
歌及び書に巧  
み。政和二年  
(一一九二年)歿。  
年七十九。

(四)奈良時代の歌  
人。延暦四年  
(一四四五年)歿。

ある世はかくてあるよしもがな

(一) 藤原武時

ふるさとに今宵ばかりの命とも

しらでや人の我をまつらん

(二) 伊藤仁齋

みどり子を見れば涙のかずそひて

ありしむかしぞいとこひしき

(三) 松平定信

埋火のあたりのどかにはらからの

まどぬせし夜ぞこひしかりける

(四) 大伴家持

かゝらんとかねて知りせば越の海の

ありその浪も見せましものを

(一)平安時代の歌人。第六十二朝天皇の朝に仕へた。

(二)鎌倉時代の文學者。平五年(一一三〇)寂。六十八年。

(三)江戸時代の國學者。和歌、文章を善くした。文化八年(一一六六)歿。四十七年。  
(四)鎌倉時代の朝臣。關白兼實政の子。攝政。た。博く。善く。永く。三十八年。永く。三十八年。

(一)鎌倉時代の朝臣。攝政。實政の子。た。博く。善く。永く。三十八年。永く。三十八年。  
(二)鎌倉時代の歌人。千載集の撰者。元久元年(一一八三)歿。一年。  
(三)小説家。名は録彌。群馬縣の。昭和五年(一一八五)歿。田舎教師。雪源義朝。袋全集の外。多。全。集。等。の。外。紀。行。の。隨。筆。の。著。者。ある。  
(四)京都市伏見區桃山町。  
(五)伏見桃山陵と桃山驛。桃山東陵。北約一五〇。メ。天。皇。と。の。皇。太。后。と。の。陵。靈。明。

世の中にうれしきものは思ふどち

はな見てくらす心なりけり

語るべき友さへ稀になるまゝに

いとゞむかしのしのばるゝかな

思ふどちまどぬせる夜は唐錦

たゞまくをしきものにぞありける

見せばやと人をぞしのぶ山櫻

あかぬ心のへだてなければ

平兼盛<sup>(一)</sup>

兼好法師<sup>(二)</sup>

よみ人知らず

村田春海<sup>(三)</sup>

藤原良經<sup>(四)</sup>

我が國は天照の神の末なれば

日の本としもいふにぞありける

藤原教良<sup>(一)</sup>

神代より三くさの實つたはりて

とよあしはらのしるしとぞなる

藤原俊成<sup>(二)</sup>

神風や五十鈴の川のみやばしら

いく千代すめと立て始めけん

三三 桃山御陵 田山花袋<sup>(三)</sup>

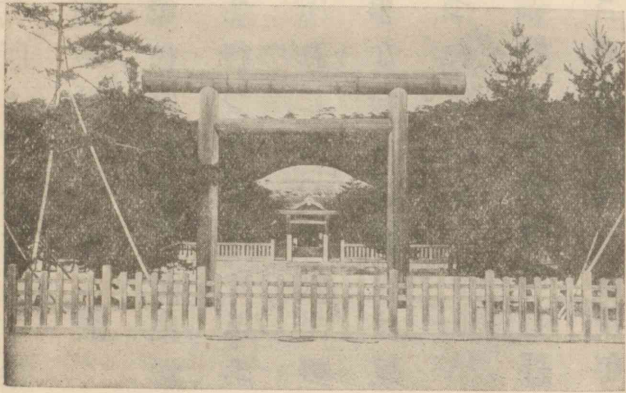
桃山の二つの御陵では、色々な事が考へられる。今を以て古を考へるといふ事があるが、實際私は、その前に額づくつと、



(一) 第四十代 奈良縣高市郡檜隈大内陵  
 (二) 第四十一代 天武天皇の皇后  
 (三) 恒武天皇の陵、桃山陵の北西  
 (四) 第五十二代

(五) 京都市東山区、四條天皇を始める所

私たちの見て来た事ばかりではなしに、遠い昔の事までも、取集めて考へられずにはゐられないのであつた。私は其所で、<sup>(一)</sup>天武天皇の陵へ後から持統天皇の陵を合せた事などを想ひ起した。また柏原の陵に御子の<sup>(二)</sup>嵯峨天皇が涙を流して祈念された事を想ひ起した。それは、その大小はあつたにしても、昔ほどの天皇でも、皆私たちが見て来たと同じ様に、一つ一つ、その陵を築かれたばかりでなく、その當時の國民の悲歎をも俱にその中に混ぜて、埋葬されたのであつた。であるのに、中世以後はどうなつたであらうか。さうした事は絶えてしまつて、あの京都の東山の南のはづれに近い泉涌寺の中に、微にその存在を示されるだけになつたではな



桃山御陵

いか。そして元からあつた一つ一つの陵などでも、亡びた國の帝王の陵でもあるかの様に、全く顧られずに何世紀かを過したてはないか。中には、どれがどれだか分らなくなつた様なものもあつたてはないか。つまり、それだけ國が衰へ世が沈んでゐたので、さういふ事をして置いてはいけないといふ事は、足利時代の將軍も、信長も、秀吉も、家康も、またそれに續いた後繼者も、みんな知らない事はなかつたのであらうけれども、或は經營

驕奢

に忙しく、或は戦亂に追はれ、或は自己の驕奢に心もしひて、其所まで手を出す餘裕はなかつたのであつた。しかし、長い間の歴史の波は、漸く大きな物を打出して來た。私たちは次第に闇いゝ歴史から、眼もきらめく様な明るい方へと出て行つた。それを思ふと、維新の時に、山陵の荒廢に著目してそれによつて勤王の志を燃立たせようとした者のあつた事なども、徒爾には見逃してしまふ事の出來ない事實であつた。

徒爾

桃山の御陵に參拜する者で、誰か我が大倭おほやまとの昔を思ひ出さぬ者があらう。千年にして始めてその昔に還されたその明治天皇の偉大な功業を、自ら戸を閉ぢる様な卑屈な政治

卑屈

脱却する

遭逢する

の状態から脱して、飽くまで外へゝと伸びて行かうとしたその立派な對外の硬政策を、何等の好運ぞ。私たちは大倭時代よりも、更に一層光輝あり、一層力ある世を、ありゝと眼の前に見る事が出來たのである。佛教などの悪い方面にとらはれて、夥しく感傷的になつた社會の空氣から全く脱却して、更に自由に、更に大きく呼吸いきづく事が出來る世に遭逢したのである。私は桃山陵の前に立つ毎に、何時も雄大な「時」の羽風が耳邊を掠めて通つて行くのを聞得る様な心地がする。

—花袋行脚—

(一) 歴史家、文學博士、臺北帝國大學總長、大阪府の朝野の變遷を見る等の著がある。  
 (二) 福岡縣(豊前國)北端の開港場、門司市。  
 税關 輸入品に税を課することを司る役所。  
 好意 ねんごろな心。  
 (三) 山口縣(長門國)豊浦郡長門の對岸、門司市の東、北約八キロメートル。  
 (四) Sudan.  
 (五) Khartoum.  
 ナイル河の上流。

自修文

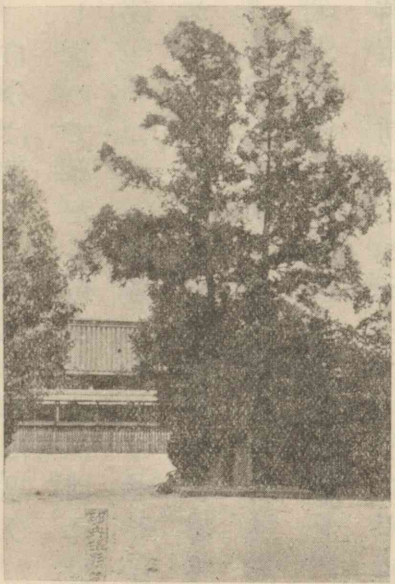
ゆかしの杉

幣原坦(一)

門司(二)で税關長の好意によつて、我が船の碇泊中に、長府の乃木神社に參拜する。神社の隣は乃木將軍の舊宅で、邸内は二百餘坪あるが、家の建坪は僅かに八坪餘に過ぎない。明治元年將軍が父十郎翁の指圖に従つて、北風を防ぐ爲に植ゑられた杉の苗は、もはや天を蔽ふばかりに生長し、將軍が歸郷の時汲んで昔をしのばれたといふ井戸の水は、東北隅の老梅の下に今尙湧いてゐる。あゝ、ゆかしの杉よ、懐かしの梅よ。  
 この杉の影は今唯二百餘坪の風を防ぐのみでない。梅の香はまた井戸の邊に薰るばかりでない。その影は世界に廣がり、その香は天下に満ちるとも言ふべきである。ずつと前に自分がアフリカの内地を旅行した時、スダンの首府カルツーム(五)に於てす

天涯地角 極めて遠い地。  
 (一) Captain Kerguelan.  
 見學 實地に見て學ぶこと。  
 犬馬の勞 君の命にしたがつて力を尽くすことの謙稱。  
 (二) George V. 西紀一八六〇—一九一〇年。  
 戴冠式 coronation of 諸國の君主の即位後にする重要な儀式。  
 (三) Dublin. アイルランドの首都。

ら、乃木將軍崇拜の英國士官に會つた事がある。  
 天涯地角(一)、所もあらうに、こんなアフリカの内地で將軍崇拜者に會はうとは、この士官はキャプテン・レッゲートと言つて、仙臺の師團に三年間見學をした人であつた。



ゆかしの杉

士官は自分に向つて言つた、  
 「私は日頃乃木將軍を敬慕してゐますので、何とかして生涯の間に、一度將軍の爲に犬馬の勞を執りたいと思つてゐます。幸ひ英國皇帝ジョージ五世陛下の戴冠式(二)には、將軍もロンドンに來られるといふ。その頃には、私も此所の守備の任務を了(三)へて、ダブリン

(Hyde Park Hotel.)

使節 政府の命を奉じて他國へ使する者。  
前約を履む 前約の約束を實行する。  
恰も好し 丁度都合よく。  
(二)現陸軍歩兵大佐(豫備役)樋波盛廣、鹿兒島縣の人。  
(三)第七高等學校。

聯隊へ歸營する事になつてゐます。萬一あなたがその頃英國にをられたならば、どうぞこの希望を將軍に通じて、何か御役に立つ事に私を使つて下さる様、取次いで下さいませぬか。自分は思ひがけない人に、思ひがけない依頼を受けて、初は少し驚いてゐたが、敬慕の情が面に溢れてゐる様であつたので、取敢へずこれを承諾した。そこで士官は大いに喜んで、自分がカルツームを出發する時、堅い握手を與へたのであつた。

さてこの年の六月、英皇の戴冠式が行はれた。自分もその頃はロンドンに滞在してゐた。六月十日の朝、ハイド・パーク・ホテルに將軍を訪うた。これ一つには、日本使節の一行が無事にロンドンに到着されたのを賀する爲であり、また一つには、カルツームに於ける前約を履む爲であつた。恰も好し、將軍の接待係である在英國日本大使館附武官樋波少佐は、自分が高等學校教授時代に

萬端 事いろく。萬

(Morning coat.)

溫厚篤實 ものやばらかてまめやかなこと。  
旅順の猛將 乃木將軍は三十七八年の日露戰爭の際、旅順攻圍軍の司令官として、勇名を馳せた。

その學校の生徒であつた様な關係から、この人を通じて、一應レット大尉の意を傳へてもらふ事にした。

然るに將軍等の一行に對する萬端の接待は、英國の皇室に於て、痒い所へ手の届く様に行はれるのであるから、少しも個人の世話を要する事はない。そこで手紙をダブリン聯隊へ出して、餘りに失望しない様に、レット大尉へ申し送つた。事は成立しなかつたけれども、乃木將軍の英國の士官の中にもこの様な崇拜者を有してをられた事が、今更の如く思ひ出されるのである。

自分が將軍にハイド・パーク・ホテルで會つた時には、將軍はモーニング・コートを著て、外出しようとしてせられる時であつた。それにも拘らず早速その部屋に通して、快く談話された。その溫厚篤實な事、少しも旅順の猛將たる面影を認める事が出来なかつた。春風のそよ吹く如き感じは、唯自分ばかりでなく、誰でも同じ

(1) Balkan.  
 (2) ユーロパの南部。  
 (3) Belgrade.  
 ユーゴスラビアの首府。  
 (4) Gland Hotel.  
 識別  
 見分ける。

驚異云々  
 おどろき不思議に思ひながら裏切られる。反對である。奇縁 不思議な縁。餘徳 先人の遺しておいた恩徳。勃發 にはかにおこる。土著の人 その土地にすみついてゐる人。歡待 こんせつなもてなし。

く與へられたものと見える。自分がバルカン半島を旅行してベルグラードに著いた時、<sup>(3)</sup> グランドホテルの番頭が自分を迎へてかう言つた、

「あなたは日本人でせう。私はもはや一見して日本人を識別する様になりました。なぜならば、數日前乃木將軍もこのホテルに宿泊されたからです。東洋の英雄はどんな烈しい人かと驚異の眼で部屋に案内しましたが、私の想像は裏切られました。將軍が温厚篤實な君子人であつたのは、全く意外でありました。この經驗は、私を將軍敬慕者の一人たらしめました。今日また此所に日本の方を案内するのは、奇縁の様に思はれます。」  
 自分は圖らずも將軍の餘徳を以て、世界大戰の勃發した災源地に於てさへ、土著の人の歡待に接する事を得た。  
 しかし、多くの外國人の中には、將軍の人となりを諒解してゐ

(一) 海軍大將元帥 伯爵東郷平八郎



る者が多いとは言はれなかつた。否、乃木といふ讀み方すらもよく心得ない人々もあつた。但し將軍に對する人氣は、たいしたものであつた。英皇戴冠式の行列の中に、東郷大將と同乗する乃木大將の自動車が現れて來ると、「ノガイ乃バンザイ」と連呼する公衆もあつた。  
 木 自分は或英國の老婦人に將軍の事希を説明して、愛子のすべてを戦場に失典はれても、御國の御用に立つてくれた」と喜ばれたと言ふと、その老婦人はこれをうち消して、「そんな事は想像されるべきでない。」と言つた。馬小屋だけは立派に建てられた事を述べると、老婦人は始めて感服して、成程、動物愛護の精神になつてゐる。などと言つた。  
 斯様に國民性の異なつた國に行くと、乃木將軍の人格を知識

直覺的に見ただけ聞いて共鳴他人と同様に感ずること

心事こゝろね

階級の人に説明する事さへ容易でないが、そこになると、我々同胞の間では、どんな無學の人でも、直覺的に共鳴を感ずる。

將軍の葬式の日、自分の家族は電車に乗つて、青山の葬場へ赴いた。車中の人々も、あなたはどこへ。私は青山へ。と、多くは青山へ行くのであつた。身なりの卑しげな一人の老婆が、小倉の袴を著けた孫の手を引きながら、あなたも青山へか。と人に問はれて、

「はい、さ様。私の一人子息は、旅順で戦死した際に、乃木大將の下で御役を務めて居りました。その御恩を思ひますれば、何として忘れる事が出来ませう。形見のこの孫をせめて亡き子息の代理として、御葬式に連れて行きます。」

一人子息が殺された時の大將を恨む事か、全くその反對に、忠實な感謝の誠意を捧げつゝある。この様な純潔な崇拜者を有する乃木將軍の心事しんじあゝ、誰か泣かされない者があらうか。

金よりも更に云々金以外に人格の必要を言つたのである。

(一)作者が歐米を漫遊した時の感想を書いたもの。大正十五年東京富士山房發行  
(二)佛文學者。早稲田大學教授。明治十三年教。佛蘭西生れた。佛蘭西讀本。自然讀本。吉江喬松詩集等。著ある。

ナポレオンは必要な物を問はれた時、一に金、二に金、三にも金。と言つたとか。これまでの日本には、金よりも更に必要な物があつたのである。  
—(一)世界の變遷を見る—

### 二三 丘の上

(二) 吉江喬松

小松と、薄と、矮い灌木の藪との續いてゐる丘の上へ來て、私はその藪の茂みの中に身を置いた。

丘はいくつかのひだをなして、背後に繞る連峯の中軸から分れて、平野の上へ迫つてゐる。そのひだとひだとの間には、小さないくつかの溪が出来てゐて、その中には、蒼黒い藪の下の下を潜つて行く小流や、急な傾斜をした桑畑や、小松の原や、焼跡の草原などが續いてゐて、農夫の作小屋の一つ二

つが目にはいる。一つの丘の上へ来て見ると、溪を隔てていくつかの丘の頂が、背比べでもしてゐる様に立つてゐる。八月下旬の日の光、眞晝頃の事、いりつけるくらゐに暑さうだが、その光を亂してをりくく、溪の中から、冷たい大氣の流が密に肌へ忍び寄る。

縁の狭い帽子は顔へ當る日の光を遮るけれど、背から肩から胸からかけて、一面に容赦なく照附けるのをそのままに、私は藪の中へ足を投出して、じつと身を締め胸を抑へて、心臓の鼓動の靜まるのを待つてゐた。

耳もと近くで、すういくと薄の葉が擦合つて、微な音を立てゝゐる。藪の根本で蟲の聲が時々起つて、また細く消え

て行く。

俯いてゐる領元から、日がじりくと食入つて、痛いくらゐにも思はれるけれど、その光が私の皮膚の細かな毛穴の一つくから、奥深くさしこんで行くのではないかと思ふと、疲れて濁つた私の血は、それが爲に鮮かな紅に變つて、勢よく運行し出す様に思はれる。寧ろ胸を開いてこの光を胸臆へ吸ひこみたい。兩手を開いてこの光を抱きたい。たぎり落ちる日の光の力を血管の中に呼入りたい。明るい光が體軀の中を照したならば、ぼろ紙の様な私の皮膚にも、弾力が増して來はすまいか。活々とした活力が欲しい。爽かな山地の空氣と日光とは、疲勞した私をまた生してくれるのでは

あるまいか。

ごうくといふ物の響が、ふと私の背後に起つた。消えるでもなく始るでもなく、空中にたゆたつてゐる。

振返つて見ると、それは赤松の林だ。樹上に高く風がからんで吹去らない。薄紅の鱗をつけた様な松の樹幹が、幾本も眞直に立つてゐて、頭だけを動かしてゐる。日は上からその葉の茂みを漏れて、地上に縞を織る。樹の根を繞つて、薄紫の草花が微に咲いてゐる。ごうと吹いて来る風につれて、微ではあるが松の香りが漂ふ。眞晝の日の光を受けて、樹幹から漏れる松脂の匂——山地の健康を思はせるその香りが、空中に漂つてゐる。

平原地の林の中をいかにさまよひ求めても、聞く事の出來ない幽玄の響、松の樹のこの單純林の奏する樂の音の中には、遠い昔からの山地の歴史が織りこまれてゐる。一簇の老樹の林のある中には、必ずいくらかの古墳がある。苔寂びた匂と松脂の香りとは、一つになつてその風の中に漂つてゐる。

細長い薄の葉と、鼠さしの細かい針の様な葉とが、入亂れた影を私の手の上に落して、をりく揺れてゐる。私は自分の手の上に描き出されたこの微細畫を壊すまいと、じつとその影の亂れつ寄りつするのを見詰めてゐた。じつ、じつと、思ひ出した様に蟲がまた薄の根元で鳴きだす。冷い風が藪

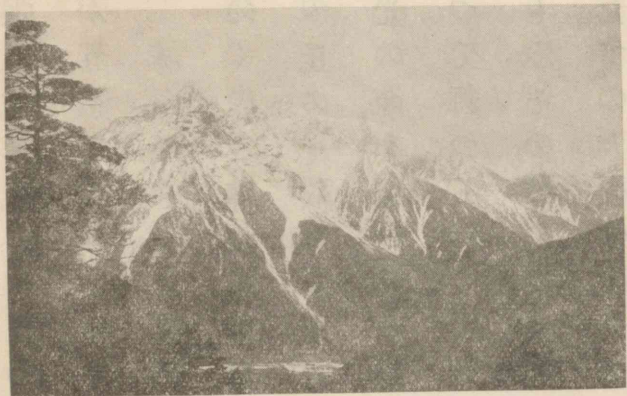


の中をはふ様に寄せて来る。

けじめ  
ふと藪の中から顔を上げて向ふを見渡した。溪を隔てて桑畑が稻田と同じ緑色をしながらも、濃淡のけじめをつけて、近く輝いてゐる。その中に鎮守の森と、地主の家の森とが、島の様に点在してゐる。——見通しのきく野は四五里を隔てて、その先に國境の連峯が鐵壁の様に空を劃して立ち續いてゐる。

穂高の群峯が他よりも秀でて、連峯の上に高く聳えてゐる。鋼鐵でも張つた様な八月の空を突裂いて立つてゐる連峯。その峯の間に消殘る雪の條は白く閃いて、中空に反射してゐる。それより北に續いて、幾多の連山が果なき山の深さ

を見せて、遠く走つてゐる。幾たび見ても目醒めんばかりの



山の姿だ。亂れた心を静め、動ずる事のない深さを胸に据ゑつけてくれる。山と空とを劃する力の籠つた、しかし、なだらかな微妙な一線。それをじつと見詰めてゐると、絶えず一種の微動が其所から起つて、四方へ散る様に思はれる。日の光と、物の響と、そしてこの音なき山頂の波動とは、一つの混成したリズムをなして、山

地の晝に爽かな活々とした調子を與へてゐる。

私の身内の血は、今こそ順調に動いてゐるぞといふ様に強く胸をめぐる。はつきりした明るい心持、活々とした感じが五體を引きしめる。

ぴいつ、くと鋭い鳴聲を立てて、渡鳥の一群が丘の出鼻のくぬぎ林の一角から、下の平な桑畑の上を横切つて、向ふの丘の一端へ消えて行つた。幾千羽群れて行く小鳥の羽は、光の波を翻し、煽り立て、光と陰とを隈取つて、我後れじと争つて舞つて行く。ぱつと高く丘の上を乗越えたかと思ふと、もうその群の姿は向ふへ見えなくなつた。鴨の一群だ。蒔きたての大根の種子を漁り、出始めたばかりの粟の穂を求めて歩く渡鳥の群だ。身を隠す林があれば、忙はしげにその中

へむぐりこみ、畑の獲物を見附けると、競つて舞ひおりの漂泊者の群集だ。光の中に潜つてゐる冷い大氣の流動に促されて、あわたゞしい姿をして、彼等は丘を越え、畑を漁つて舞つて行く。

頭上の松の響も、溪の中の流の音も、藪疊の上を走る冷い風も次第に高くなつて來た。静かな山地の眞晝は、今ひと時秋の來る前に、その鮮かな働を見せてゐるのだ。

私は何時までも何時までも、丘の頂に身を埋めてゐた。

—若き自然—

(一)文學者。本名高知正市。高知市人。五十四年。白菊、花紅葉、日本文明史、學生訓等の著あり。桂月全集十二卷に收められてゐる。

(二)東京市淀橋區角筈。

(三)同區大久保。

## 二匹 田園雜興

大町桂月<sup>(一)</sup>

角筈<sup>(二)</sup>に住みし頃は三兒ありき<sup>(三)</sup>。大久保にて一兒を失ひたるが、今尙四兒あり。上の三兒は男にして、末の一兒は女なり。我性、植物を好めども、動物を好む事更に甚だし。花美なれど、久しくこれに對すれば變化なきに厭く。動物には變化ありて、終日相對して厭かず。されど四兒をもち立つるに手のかかるを以て、妄りに多く動物を飼はず。雞を飼ひしが、犬常に來り襲ひ、その一つ遂に犬に奪はれたり。かはいさうに思ひて、飼ふ事を止めぬ。小池を掘りて鯉、金魚を飼ふ。我執筆に倦みて庭に出づる時は、先づ必ずこれに對す。その泳ぐ様何と



大町桂月

なく趣味あり。されどそれを見て喜ぶ小兒の様を見れば、尙一層の趣味を感じず。移り住みてより二三箇月の間は、唯庭園を逍遙する事が面白かりしも、馴れては初の様には珍しく思はず。小兒を連行けば、庭園常に一種の趣味を生ず。小兒の爲に蟬を捕へたり、栗を拾ひたり、また枯木を拾ひたりするにつけて、庭園の逍遙、常に愉快なるを覺ゆ。目的のある所活動あり。活動ある所常に新趣味あり。世に生れて目的のなき者は、遂に人生の趣味を解せざるべきなり。

家庭に小兒あるは、庭園に花あるが如し。四兒もあれば閑

をつぶすに餘りあり。成るべく戸外に運動せしめんとて、先づぶらんこ二つ設けぬ。生れて一年半許になれる女の兒も兄の眞似して、わらびの如き手に麻繩しかとつかみて運動するを、こよなき樂しみとするを見るが、こよなき樂しみなる親の心、子もたぬ人は知らざるべし。ひとり逍遙して面白き物見附けては、兒にも見せんとて戻り來る事あり。子庭に出でて久しく戻らざるに、何をなしゐるにかと懐かしくなりて、其所此所尋ねまはり、兒の名を呼ぶ聲を、空しく木魂に答へさする事も屢なり。

暇ある毎に庭園を逍遙するにつけて、樹木の様を見盡し、蟲を見盡しぬ。枝ぶりの面白き木は松、梅、楓、柿、櫻、百日紅など

なり。松は庭園に附物なり。種類多く、枝ぶりも様々なるが、頑健の様にて何となく卑し。梅はあばずれ女の如し。されど花をつくれれば憎らしくはあらず。百日紅の枝ぶりは、垢ぬけしたる女の様なれど、皮の剥ぐるが疵なり。楓は勇肌はたけの男の如く、柿は實のみ賞せらるゝ物なれど、我その枝ぶりに一種の風情あるを愛す。杉はばか正直の人の様なるが、多く立ち並べば莊嚴なり。木の花にては櫻が花主なる事言ふまでもなし。草花にては我朝顔を愛す。その一朝にして落つる事、最も面白し。盛り久しき百日紅は人に厭かるべし。されどその花の色、桃李に優れり。概して花の美なるは實甘からず、實の甘きは花美ならず。唯桃李は二つながら併せ得たれど、花は梅

兀然  
以爲へらく

櫻に如かず、實は梨柿に如かず。常磐木、四時葉をつくれど、また常に枯葉を落す。木は花をつけたり紅葉したり、兀然として骨立したる物こそよけれ。

衣食住のうちにて我以爲へらく、衣は垢つき居らずして冬寒からざるだけなれば十分なり。我他に望なし。食物もからだ相當に滋養を取れば足れり。必ずしも美味あるを望まず。我は唯望む。家は壯麗ならざるも、さつぱりして、まはりこみ合はずゆるやかにして、樹木あり眺望あらん事を。この望は角筈に住みて稍かなひ、此所に來りて最もかなへり。一生住めばこの上もなけれど、我が所有にあらず、賣物となりければ、何れ買ふ人ありて追出されん事、角筈村に於ける如く

(一) 儒者。號は梧樓。陸中の盛人。幕末の頃、藩を以て盛岡に仕へ、論を唱へて尊王躍した。明活王五十二年歿。年治  
(二) 茨城縣猿島郡  
(三) 共に滋賀縣甲賀郡、東海一、道五十三次  
(五) 藤原藤房。吉野朝の忠臣。

なるべし。されど事の終りたる後より見れば、一二年もあつけなければ、十年もあつけなし。一生もまたあつけなし。一日住めば一日の願足り、一年住めば一年の願足る。買ふ人あらんまでは、余に取りては浮世の樂土なり。

二五 繪畫の感化

那珂通高

下總國の古河驛に、その氏は忘れしが、茂足といふ歌人ありき。その人、二十年許の昔、陸奥に來りて物語せし事ありしを、今思ひ出でたれば、書綴りて人々に見せ參らせん。

茂足少き時東海道より京に上る。近江の石部と水口との間に、萬里小路中納言藤房卿の古跡と彫りし碑あるを見た

りしかば、その跡のゆかしさに尋ね入りて見るに、観音寺といふ寺ありて、其所に卿の念じ給ひしといふ観音を安置せり。

うちつけ

その御佛の御前に、我より先に旅商人と思しき五十餘歳の男入り來りて、何事を歎くにか、さめくくと泣きあたり。うちつけにその故を問ふべくもあらねば、立去りてもとの驛路に出でぬ。頃しも如月の初なりければ、日影暖なる所を見出でて憩ひるたるに、かの男も出で來ぬ。茂足は「日影も暖なり、ちと休み給はずや。」と言ふに、かの男會釋して、同じ所に腰うち掛けたり。しばし四方山の物語して、さて後に「先には観音寺にて見掛け參らせしが、かの卿に深き御所縁などおは

會釋

四方山

やんごとな

しますにや。」と問ふに、いと恥ぢらひたる氣色にて、「さては世に似ぬ歎せしをや見給ひけん。賤しき身のいかでやんごとなき御方に所縁などいふ事の候べき。但し、今日しもふと思ひ出でし事ありて、涙せきあへざりけるを、恥づかしくも怪しまれ候ひけん。懺悔には罪も滅ぶと承れば、若き時の罪滅しに、途すがら語り聞えん。」とて、諸共に立出でぬ。

(一)今大阪市東區。

刀自  
いとほし

(二)千葉縣山武郡。

(一)この男は津の國大阪の人にて、稚かりし時に父母を喪ひ、高麗橋あたりの商人の家に奉公してありけるが、その家の子は遊蕩に耽りて、家繼がすべくもあらぬ様なりしかば、父は怒りて、勘當しけれども、母刀自は一人の男子故、流石にいとほしがりき。上總の東金(二)に出店あれば、竊に其所守る人に

お事

具す

(一)埼玉縣東足立郡

頼みてんと思ひ寄りしかど、遙々の旅路を一人遣らんも心許なくて、この男召出でて、「お事は御兩親共に世にまさねば、何所に住むとも心安からん。後には必ず家分けて得さすべし、暫時が程我が子に具して上總の方に行きてよ。」とて、金二十兩程預けられたり。さてその子と共に大阪を出てたれども、若き人の習にて、勘當受けし身の尙過を悔いもせず、夜毎に酒を廢めざれば、中山道の(一)蕨驛に來りし頃には、その金も残すくなになりにけり。

明日江戸より船出せば、東金に渡らん事も難からじなど聞くにつけて、行末の事を思ひ續くるに、かゝる頼もしげなき人に具して出店に行きたらんには、たとひ母刀自の書あ

えせもの

よしなき人

よすが

賣りしろ

りとも、同じむれのえせものとや思はれん。よしさは思はれずとも、この人の心なほらぬ程は、大阪にも歸らるまじ。ともかくにも、よしなき人に伴ひて遙かに來りけりと、悔しさ限りなかりしが、また思ふ様、身を立てよすが求めんには、江戸にまさる所やはある。此所まで來しこそ幸なれ、今宵のうちこの人を捨てて歸らばやと思ひ寄りしかど、暫時の程も貯なくてはいかゞはせん。かくと知りなば、預りし金あるうちに、とにもかくにもすべかりしを、後れにけりとまた更に悔しがりけるが、この人の脇差は、その父の物好より、百兩餘のつひえもて作りたる物なる事を思ひ出でて、よしよし、こを盗みて賣りしろなさんには、十日、二十日の日を送る

に難き事はよもあらじと、心一つに謀りすまして、さらぬ様にもてなしつゝ、今宵限りの旅寝なればなど言ひこしらへて、酒勧めて寝させぬ。

夜更けて後にそと起出で、枕邊に忍び寄りて窺へば、立てまはしたる屏風の内に、鼾の聲のみ聞えたり。時こそよければ、徐に屏風に手を懸けて引きあくるに、内より行燈の火影のさとさし出でて、後のふすま障子に映りたるを、人や來ると驚きて願れば、今まで見も入れざりしそのふすまに、藤房卿の笠置(一)より後醍醐天皇の御供して大和の方へ落ち給ふ時、松蔭に袖敷きて、その上に帝を寝させ奉りし形をなん描きたりける。この男これを見て、あなあさまし、やんごとなき

(襖)

(一)京都府(山城國相樂郡木津川の南岸)元弘元年(一一九一年)醍醐天皇(北條氏)の行幸され

御方だに、君の御爲にはかゝる習はぬ憂き目をも見給ふものを、いかなれば我は主の物盜まんとまで思ひなりにけんと、悔しくも口惜しく覺えて、寝ねたる人の枕邊に額づき、繰返してその過をうちわびたりき。

かくて東金に到りて後も、憂き事あればこの夜の事を思ひ出でて、六年、七年過ぎたりしに、その人の心改り、家に歸りて父の跡を継ぎしかば、我も約束の如く家分けて與へられたり。それより次第に仕合よくて、今は家業も子に任せて、あかぬ事なき身にはなりにたれど、さてのみ居らんも後めたさに、をりくは此所らあたりまで物あきなひに參るなり。されば何時とてもこの寺には詣でぬれど、今日しもふと思

後めたし



はふり落つ

まろやかな心

ひ出でければ、若しそのをりしもこの卿の御姿を見參らせ  
ずば、いかでかく事なくて世にはあり經べきと、忝さに涙は  
ふり落ちて、君にも怪しまれ候ひぬ。我は賤しき生れながら、  
若き時より軍物語の書讀む事を好みければ、その時しもこ  
の事を思ひ出でて、まさなき心を改めぬ。よりて子供等にも  
物讀む事は常に厳しくおきて侍りと語りぬとぞ。茂足はそ  
の頃四十歳許の人なりき。

—洋々社談—

### 二六 國史に返れ

<sup>(一)</sup> 徳富蘇峯

「國史に返れ。」日本國の歴史は大和民族の系圖である。吾人  
祖先の功科表である。日本帝國の寶庫である。日本國民の經

(一) 歴史家、評論家。名は猪一、(二) 五三三年、肥後國に生れた。國民叢書、静思錄、近世日本國民史等、著者あるの功科表、經典

典である。日本國を知るには、國史を透して知るより他に方便がない。國史は實に忠實な案内者である。信賴すべき指導者である。

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は平等觀よりすれば皆同胞である。しかし、歴史觀よりすれば、すべての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、而して丙國と甲國ともまた同じでない。十箇國あれば十箇國の相違があり、百國あれば百國の差異がある。この特殊の國性を維持する上に於て、始めて獨立國の意義が完うされる。獨立國の意義は形式的に他の干涉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない。精神的

干涉體面

把持する

に自主であらねばならぬ。詳に言へば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展し、發達させねばならぬ。

我が大和民族の誇は日本の歴史である。この歴史の中には、必ずしも悉く皆正しい事善い事のみが満ちてはゐない。必ずしも悉く敬ふべく仰ぐべき事のみが溢れてはゐない。人間は決して神様ではない。人間の所作には様々な過失もあれば、罪惡もある。しかし、總括して言へば、日本の歴史は決して大和民族の恥辱史ではなく、光榮史である。

いかに日本の皇室が世界に比類のない有難い皇室であるかは、國史が最も雄辯にこれを語つてゐる。いかに日本の國民がその一旦緩急の際に處して、護國の精神に猛烈に且

一旦緩急の際

剗切

(一)明治元年三月十四日明治天皇が紫宸殿で天神々に誓はせられた新條の方針五箇條の  
(二)明治二十二年二月十一日發布

固陋頑冥  
詭激狂妄  
架空浮誇  
乾燥無味

勇敢であつたかは、國史がその證人である。いかに大和民族のうち世界的偉人と比較して一步も劣らぬ者、即ち彼自身また世界的偉人と稱するに足る者を生じたかは、長い年代のうち屢接觸した所である。即ち我が明治天皇の盛徳大業も、國史の背景によつて始めて明白に、精詳に、剗切にこれを會得する事が出来る。國史の背景がなかつたならば、五箇條の御誓文の如きも、一種の雄快な文書たるに止るだらうし、帝國憲法の如きも、單に乾燥無味な一部の法文に止るであらう。

凡そ固陋頑冥な戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若しくは詭激狂妄な赤化主義や、架空浮誇の模倣精神は、何れも

閑却する  
株守する

醉生夢死

諒解

我が國史を閑却するからして起るのである。現状を株守するのにも國史を知らないが爲、現状に不安を感じずるのにも國史を知らないが爲、國民的自信力を失墜するのにも國史を知らないが爲、自惚根性で醉生夢死するのにも國史を知らないが爲ではないか。

「國史に返れ」とは、すべての國民が歴史家となれと言ふのではない。それには専門の學者がある。唯日本國民として日本の歴史のその大いなる筋道を諒解せよと言ふのである。苟くも國民的に生活し且活動しようとするならば、先づこの道に向つてすべての物を求めるがよい。

(國民小訓に據る)

祭政一致

## 二七 祖先を崇び家名を重んず

社會學上から上代の我が國家を見れば、いはゆる神祇政治であつた。即ち祭政一致の状態で、治者は神祇、上も神もひとしくカミであつた。政治は即ち祭祀で、ひとしくマツリゴトであつた。また一方から見れば、宗族政治で、宗家が分家を支配したものであつた。公は即ち大家おほいけであつた。かういふ事は強ち我が國に限つた事ではない。原始社會にはいくらかも類例のある事である。唯それが太古から今日まで持續し來つて、立憲政治の今日まで残つてゐるといふ事が、甚だ珍しいのである。社會進化論の上に一特例を成したものと云つ

軋轢  
 民主主義  
 闊歩  
 仰慕する

て宜しい。支那の文明を吸収し、印度の教義を採用して、神儒  
 佛合體で國家を治めるといふ聖德太子の方針で、今日まで  
 の變遷をなして來たに拘らず、この太古の政體に伴なふ所  
 のカミ、オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心即ちマゴコロを  
 今日まで少しも失はず、それで何等の争亂もなく、軋轢もな  
 く、更に西洋の民主主義を入れて、立憲政體を成し得たとい  
 ふのが、面白い所である。この昔ながらの國體で、今日の世界  
 の間に闊歩して行けるといふのが、我が國民の強みである。  
 さてこの神祇政治、宗族政治の根本となつてゐるものは、  
 言ふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇して  
 これを畏敬し、これを仰慕する念がなければ、固よりこの様

神話の神々は、一方に於ては自  
 祖先の大功業者た  
 月

一、自らの支那の文明を吸收し印度の教義を採り用して神皇  
 德嗣の國家を治めるといふ聖德太子の方針を奉行して  
 の神皇をまつて来たに於てその大古の政體に作るべき所  
 の方々をホヤケに對する神皇心教義の心算してゴコロを  
 今日まで少しも失はずとて何事の争亂もなすれずとも  
 く更に西洋の民主主義を引入て立憲政體を築き持たとい  
 ふ事や實に奇蹟であるが、その昔ながらの國體を今日の世界  
 の間に留步して行けるといふのが我が國體の根本となつてゐる  
 事である。この神皇政治の根本を失つてゐるなら、  
 言ふまでもなく無光榮である。つて、  
 これを擧げしこれを抑息したの  
 れたのは、即ちこれが爲である。今

神籬を鳥見山に

文始には「先づ伊勢神宮の事を奏す」  
 があるが、これは大寶令  
 を以て

發行所

東京市神田區  
神保町二丁目三番地

合資會社 富山房

電話 神田二一七一 二二七八 番  
振替口座東京五〇一八番



版權所有

昭和七年十一月一日印  
昭和七年十一月三日發行  
昭和八年七月十七日訂正再版印刷  
昭和八年七月二十日訂正再版發行

帝國實業讀本

定價  
自卷一至卷六 各金六拾錢  
自卷七至卷八 各金五拾四錢  
自卷九至卷十 各金五拾壹錢

編者 芳賀矢一  
訂補者 上田萬年  
同 長谷川福平

東京市神田區神保町一丁目三番地  
合資會社 富山房

發行兼印刷者 坂本嘉治馬

東京市小石川區音羽町七丁目六番地  
富山房印刷部

印刷所

浦野製

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '民主主義' and 'この間を機歩して行ける'）

